

御会式文化資料叢書3

明治・大正新聞記事集成

明治・大正の東京朝日新聞、読売新聞の二紙より、御会式ならびに周辺文化に関する記事を集めた。

まとめるにあたり、旧字を改め、繰り返し省略記号を文字に改め、読みやすいように一部句読点を加えている。

本書収録記事を利用する場合は以上の点を踏まえ、必ず元の新聞にあたるようご注意ください。

明治八年（一八七五）十月二十三日（読売）

○近ごろ太陽曆に成ッて随分日を取違へたり思ひ違ひでおかしいことが有ます。彼の日蓮宗の御会式なども今月が本とうだ、イヤ来月が本とうだなどと勝手なことをいふゆえ、今度日蓮宗の御会式は毎年十一月二十一日と極りました。是らを考へて仕組だものか、横浜の佐の松では此ほど日蓮上人の一代記をいたしますが、作者などはよく氣のつくもので有りますと横浜より申して来ました。

明治九年（一八七六）十月十三日朝刊（読売）

○昨日はお会式だとして池上本門寺へ大そう人が出かけ、朝から午後二時までには新橋から品川まで蒸気車へ乗ったものが二百八十人、大森まで乗ったものが千二百六十三人（ふだん大森まで乗る人は至ッて少ないのに）。是でも池上の賑はひは思ひやられます。

○お籠りならば籠らんせ太鼓もどんどん打ッてある。巡查も此ごろ廻られる池上あたりの賑はひは年に一度の取こどき。万灯の明りは瓦斯よりも明るく数珠の大きさは事問団子も三舎を避け家業を休んでどんどこんどこ。曲ツた袷も七字の題もく南無妙法の金策で出して着た山しぐれ。月品川までは蒸氣の力それから宿を通りもの。通客じみた清元銀杏は吉原かぶりで横町の文字猫さんを誘ひ出し。両掛けの供つれば講中の中きき、村の娘の大根足も黒下駄のおろしたて。日蓮を出しに遣ッて信心一分の遊参九分。これでは面白半分で信といふ字に叶ひますまい。モウ此様な信心は今年かぎりでお廃しがよからう。何でもおめい講だのおいしきだのと、下がかッた名はドツと仙人衆の千人講中たちも怒ッちや否だよお腹が立たら御難の牡丹もち、甘くなだめて下さいナ新聞屋さん。大井村笹野宗八（読者の投書）

明治九年十月十四日朝刊（読売）

○一昨晩は品川にて何所の馬鹿だか日蓮宗の氣違だか太鼓をたたき立って巡査にしかられ、池上本門寺の本堂で矢田部藤右衛門という男が夢中に成つて半鐘をたたき立つたので、是も巡査に叱られる笑に正氣とは思われない仕うちでありました。

明治十年（一八七七）十月十三日朝刊（読売）

○一昨日の暴風雨に引き替て昨日は天気も好つたゆえ、池上本門寺の会式は朝から例の信心連が我も我もと押し出し、本門寺の門前の料理屋などは爪も立ないほどの大繁昌。また境内の鐘撞堂の前に西南にて戦死した者の為に大塔婆を建て、本堂と祖師堂には老若男女の差別なく一杯に詰め掛けて居り、是に付て品川分署の署長を初め警部と大森の警部方が巡査を連れて出張された程にて。コレラ病の為に医師も出張され群集の中を厚く保護されました。

明治十二年（一八七八）十月十日朝刊（読売）

○今月十二日十三日は例の池上本門寺の会式で、旧習のお籠があるからとて今より巡査の交番所が門前の丹波屋に極つたと。

明治十一年十月十一日朝刊（読売）

○池上へ参詣人が有るとして明日と明後日は新橋鉄道の下等車を常より増されます

明治十一年十月十五日朝刊（読売）

○今月十二日の晩に池上本門寺へお籠りに出かけた下谷坂本町三丁目の宮崎伊助の女房おつねは、側に居た新吉原京町二丁目の貸座敷林おつやの妹おみねの簪を盗もうとしたとて早速巡査へ引渡されたが、此女は常に堅い気性ゆえ大かた人間違でも有ろうといい、また同所の門前に男が一人死んで居たが是では信心も。

明治十三年（一八八〇）十月十三日朝刊（読売）

○昨日は雨天ながら池上本門寺のお籠りは例年の通り賑やかで、臨時発の汽車の中も随分こみ合ました。

明治十四年（一八八一）九月二十八日朝刊（読売）

○来月七日より十三日まで池上本門寺のお会式につき、参詣人の便利の爲め新橋、神奈川、横浜の三停車場より大森まで値下げの往復切手を発行になり、且二十三の両日は新橋と大森の両方より臨時汽車を發車になります。

明治十四年（一八八一）十月八日朝刊（読売）

○昨日より十三日まで池上本門寺にて日蓮上人の六百回忌の法会を営まれるに付き、門前の丹波屋はじめ掛茶屋等にては沢山仕入れて客を待ち、各所の講中は旗幟に飾りを競って陸続と参詣に出かけ大層

な賑ひで有ります。

明治十四年十月十四日朝刊（読売）

○一昨日昨日の両日は池上本門寺の会式にて、殊に当年は宗祖日蓮の六百年忌につき、例年よりは一層参詣人が群集し、新橋品川大森とも停車場の混雑は実に甚だしく。一昨日の午後四時より五時二十分頃まで僅一時間余の間に品川の停車場へ溜った池上行の人数は凡そ千五百四十五名にて、場内は人の山をなし是ばかりでも当日の群集が察しられますが、併し品川警察署より巡査が数名道筋や本門寺は境内へ出張して取締りを致されたゆえ、喧嘩または迷子等は至つて少く穏かに済んだが、昨日の雨にて此道筋の人力車は非常の値にて、池上より大森の停車場まで僅二十町ほどの所ですら三十錢ほど、品川までは一円位で有つたとは随分阿漕な貪り方だ。

明治十四年十月十五日朝刊（読売）

○昨日も一寸出した今年の池上本門寺の会式には例年に十倍の参詣人有たが、品川警察署にて刑事巡査其ほかの人々が深く注意し、去る十二日一昼夜にスリを二十九名召捕られ夫故かスリに有た者は至つて少いと見え、南品川の豆屋の女房が三円ほどの中指を捕れた由を訴へ出たのみにて今以て一人もスリ等に逢た由を訴へ出ぬといふが斯く多忙中にも中窃盜三犯にて。今年一月十九日に懲役十年の処刑に成た荏原郡久ヶ原村の中島米吉（二十八）といふ賊が、去る十日に外役先より逃去り同郡馬込村の字堂寺といふ山の谷合に隠れて居る由を聞込むや否や直に同署の刑事巡査一名とほか三名にて同所へ赴き

強力の聞え有る米吉を難なく捕縛されたは去る十二日の午前十時頃の事で有りましたと。

明治十五年（一八八二）十月七日朝刊（読売）

○来る二十三日の両日は池上本門寺の会式につき、鉄道局にては新橋大森の間臨時列車を往復し、また両日限り往返切手を発行されます。

明治十五年（一八八二）十月十三日朝刊（読売）

○兼て紙上へ出した如く、昨今両日は池上本門寺の会式につき、天気都合もよいので新橋より大森までの汽車は室内一杯の乗客にて、諸講中の旗造り花万灯などは人力車に積み乗せて高輪の往来を引もきらず、近年稀なる賑ひなりとの事。

明治十五年十月十四日朝刊（読売）

○一昨日池上本門寺の会式は生憎午後六時ごろよりの雨にて数万の参詣人は皆な本堂祖師堂其外の諸堂へ一杯に押詰め身動きもならぬ程の雑沓にて。また散歩の者や往来人は一時大森ステイションへ駆け込み、汽車の乗客は山の如くゆえ巡査の制しも聞ばこそ年寄子供の怪我もかくなからざりしとの由。

○また右につき一昨日新橋より大森まで臨時汽車の乗客は八千人余で有りましたが、昨日は蒸気釜が破損せし為め俄かに汽車を差止られしとか。

明治十八年（一八八五）九月二十三日朝刊（読売）

○池上の花火

来月十二日池上本門寺に於て午後三時より翌十三日の午前六時まで御命講の際、花火製造師より奉納の、荻野流煙火百本講中より奉納の煙火百五十本打揚げたき旨、市ヶ谷本村町の宮本佐源二より昨日其筋へ出願したり。

明治十八年十月八日朝刊（読売）

○臨時汽車

来る二十三日の両日は法華宗の会式につき、新橋の停車場にては池上本門寺へ参詣人の便利と謀り例年の通り十二日は午前四回午後六回十三日は其外に猶午前五時四十分と七時三十五分発の特別往復汽車を発せらるゝ由。

明治十八年（一八八五）十月十一日朝刊（読売）

○八景ヶ岡の菊細工

大森の公園八景ヶ岡内へ明日明後日の本門寺参詣人を当込み菊細工にて日蓮上人の生立より終焉までの一代記を造りて諸人に縦覧させるとの事なるが、其他に丈五間長さ一丈もある大象、三間半に四間の大亀などの造り物が出来て十二日の夜には煙火を打上げるとの事。

明治十八年十月十五日朝刊（読売）

○古金の寄附

去る十二日、池上本門寺客殿の賽銭箱へ古二朱金三分二朱と新二朱二分都合一両毫分二朱に明治十八年六月十三日深心妙敬信女と記して投入れ在し由。

明治十九年（一八八六）十月十三日朝刊（読売）

○池上会式

昨今兩日は池上本門寺の会式に付、府下を始め近郷近在の信徒の参詣人夥敷きにつき、新橋鉄道局にては第一列車より引続き発車ごとに乗客の群集する為め往復売捌口へ巡查が出張し怪我等の無いやうにと充分保護を加へられしも、我れ先にと切符を争ひ其雑沓一方ならねば更に取締の為め駅長助役改札員構内取締員等を増加されたと云。

明治十九年十月十五日朝刊（読売）

○臨時汽車揚り高

池上本門寺の会式に付、一昨日と一昨々日の兩日臨時に開かれたる新橋大森間の汽車賃は千八十三円にて此の乗客は七千人なりしと。

明治二十年（一八八七）九月九日朝刊（読売）

○片瀬の縁日

来る十一十二の両日は相州鎌倉なる片瀬の龍口寺日蓮上人難会に付、参詣人便利の爲め鉄道局にては左の通り臨時汽車を發せらるると云（時刻表省略）

明治二十年（一八八七）九月十五日朝刊（読売）

○汽車賃上り高

去る十一十二の両日は鎌倉片瀬龍口寺日蓮上人難会の法会執行に付き、鉄道局にては臨時汽車を發せられしに、東京藤沢間の各停車場等の旅客は凡そ五千五百人以上にして此金額千二十二円餘なりと。右は十二日の収額にして十一日は単に三百円計りなりしとぞ。

明治二十一年（一八八八）九月十一日朝刊（読売）

○臨時汽車

明十二日と十三日の両日は相州鎌倉片瀬村龍口寺の縁日に付（日蓮上人龍の口の御難の当日なり）新橋鉄道局にて参詣人便利の爲め横浜藤沢間の臨時列車を發せらる其時間は（以下省略）

明治二十一年十月九日朝刊（東京朝日）

●本門寺会式

来る十二十三の両日は池上本門寺の会式に付、新橋大森間に左の臨時汽車を發するより。

十二日新橋発 午前八時十五分同九時二十分同十時二十分同十一時四十五分午後一時同二時十五分同三時三十分同四時三十五分同五時四十五分同七時同八時十五分

大森発 午前八時四十五分同九時五十分同十一時午後十二時十五分同一時三十分同二時四十五分同四時五十分同六時十五分同七時三十分同八時四十五分

十三日新橋発 午前五時四十五分同七時

大森発 午前六時十分同七時三十分

明治二十一年十月十三日朝刊（東京朝日）

●会式の賑ひ

昨今兩日は池上本門寺の会式なるが、例年の通り押返されぬ程の賑ひにて品川警察署よりは大森池上両村内の各所へ巡查を派遣し、愛宕町警察署にては新橋停車場へ刑事巡查を派して掏摸の用心あるなど一方ならぬ雑沓を極めたり。

明治二十一年（一八八八）十月十四日朝刊（東京朝日）

●会式詣の人数

池上本門寺会式の景況は前号にも一寸記せしが、之が為め一昨日新橋大森間の臨時汽車に乗りたる客は中等三百八十四人内小児三十三人此賃金五十五円二十九銭、下等片道三千五百五十人内小児百二十一人此賃金三百十四円六十六銭、同往復六千七百七十四人内小児三百九十八人此賃金千八百八十三円五十銭、

人員合計一万七百八人内小兒五百五十二人賃金合計千五百五十五円四十五銭なりしといふ。此他徒歩若くは人力車馬車にて赴きたるも無数ならん。池上の山に人の山を築き雑沓一方ならざりしも無理ならず。

明治二十二年（一八八九）九月十一日朝刊（東京朝日）

●臨時汽車

明日明後日は鎌倉片瀬龍口寺にて営む日蓮上人の難会に付き、鉄道局にては參詣人の便宜を謀り横浜藤沢間の臨時汽車を差立てる筈なり。其発着時間は横浜発午前十時十五分、午後十二時四十五分、二時四十五分、七時の四度。藤沢発午前十一時十六分、午後一時四十六分、三時五十分、六時、八時三十一分の四度なりといふ。尤も雨天又は乗客少なき時は中止する筈なり。

明治二十二年十月十一日朝刊（東京朝日）

●臨時汽車発車時限

来る十二、十三の両日は府下荏原郡池上本門寺会式に付き、新橋停車場にては參詣人の便利を計る為め同日は同所大森間に臨時汽車を発する筈なるが、其発車時限は十二日新橋発午前七時四十分、同九時、同十時、同十一時十分、零時二十五分、同二時十五分、同三時二十分、同四時二十分、同五時三十分、同六時三十分、同七時三十分大森発午前八時十分、同五時三十分、同十時三十五分、同十一時五十分、午後五十五分、同二時五十分、同三時五十分、同四時五十分、同六時、同七時、同八時十分、十三日新橋発午前六時二十五分、大森発午前六時、同六時五十五分なり。

明治二十二年（一八八九）十月十五日朝刊（読売）

○会式に付ての乗客

池上本門寺会式に付一昨十三日新橋大森間臨時汽車乗客員数は上等二十九人同小児三人中等百六十九人内同小児六十四人下等片道千三十六人内小児六十四人下等往復五百八十人内小児六十六人なりしと。

明治二十三年（一八九〇）十月五日朝刊（東京朝日）

●会式の臨時汽車

来る十三日は例の日蓮宗祖師会式に付、池上本門寺参詣人便利の爲め新橋停車場にては同所横浜間臨時汽車を發し且つ往復乗車券をも發する筈なり。

明治二十三年十月十一日朝刊（東京朝日）

●臨時汽車値下

池上本門寺会式に付、臨時汽車出發の事は本紙第二頁に記す如くなるが右に付二十三の両日に限り新橋大森間通用下等往復切手の賃錢通常十四錢の処を十二錢に低減するよし。

●会式の臨時汽車

明十二日より二日間池上本門寺会式に付、例に依て新橋停車場より臨時汽車を發する由は此程の紙上に記せしが、右臨時汽車出發時刻は左の通りにて往返とも品川に停車し且つ兩日間通用の新橋大森間下等往復切符をも新橋停車場にて發売する由。但し雨天なれば殊に依り發車せざることあるべしとなり。

新橋発 大森発

午前七時四十五分 午前八時十五分

同九時 同九時三十分

同十時 同十時三十分

同十一時十分 同十一時四十分

午後十二時十分 午後十二時四十分

同一時十分 同一時四十分

同二時十分 同二時五十分

同三時二十分 同三時五十分

同四時二十分 同四時四十五分

同五時二十分 同五時五十分

同六時二十分 同六時五十分

同七時四十五分 同八時十五分

又十三日に限り右に記載の外 午前六時二十五分新橋発、午前六時大森発、同六時五十五分同所発の臨時汽車を差立つるよし。

●池上の参詣

下谷辺よりは七五三講、下谷講、神田八講及び其の他の題目講中は世間の不景気にも拘はらず、一同揃衣も出来万灯も立派に新調し番号順を以て繰出す支度のよし。就ては数寄屋町同朋町加賀ッ原其の他の唄ひ女連も講中に交つて押出すもの少なからずと、また浅草公園地の吾妻座にては先頃日蓮上人真実

伝を興行せし縁により同座の俳優嵐鱗昇澤村其答を始め一同、同公園地の唄ひ女連も題目當団結し孰れも明十二日午後団扇太鼓を叩き立て押出すよし。

●会式の点灯

明十二明後十三の両日池上本門寺会式に付、大森新橋間は臨時汽車を差立て参詣人の便利を計るとは第二頁に記せし通りなるが、例年両夜は大森停車場に大篝火を焚き往來の道路を照したるも、本年よりは米国發明の「ウエルスライト」を点灯するよし。同灯は電気灯にも劣らぬ光力あるものなりと。

明治二十三年（一八九〇）十月十二日朝刊（東京朝日）

●会式参詣の支度

芝品川辺の日蓮宗徒は今十二日拂曉より池上本門寺の会式法要に参詣するとて前日来万灯旗幟等の支度中なりし。

明治二十三年（一八九〇）十月十三日朝刊（読売）

○昨日会式の賑ひ

一昨夕景より雨降出し一時は盆を傾くるが如くなりしかば、昨日を当込みに高利の金を借り又は典物をなして飲食物を仕入れたる小商人等は枕も高く寝られぬ程に氣を揉みたらんが払曉に至って秋雨漸く上り一天晴れ渡りて小春の好日和と相成りたれば彼の小商人等は勇みに勇み車に荷を積み或はになひて池上本門寺へと駆付ける者引も切らず。参詣人は老幼男女官員商人書生職人芸人芸妓信者不信者の差別な

く十二時頃より陸続と新橋停車場に押かけたれば、停車場にては雑沓を防ぐ為め場外の広場に下等往復切手売場を設け乗車場出入口の混雑を制する為に数條の鉄鎖を張りたり。列車は何れも十五六つづあれど溢るる計りにて、中には汽車の窮屈を避けて人力車にて走るあり乗合馬車にて行くもありて中々の賑ひなりしと。

明治二十三年十月十四日朝刊（東京朝日）

●会式の汽車賃

池上本門寺会式に付一昨日新橋より差出たる臨時汽車乗客は往復九千三百八十四人にして此の賃金千七十六円四十一銭なりしと。

●池上本門寺会式の景況

一昨十二日同寺に於て執行したる高祖上人のお会式は、仕合せと天気も快晴し夜に入りても星が降る程の空合なりしにぞ。参詣の群集おそろしき程の登山にて歩より行ものは芝高輪通りに数千の万灯引きも切らず。汽車より行ものは新橋大森両停車場の雑沓一方ならず。品川通りは駅外れより大道商人途切れ途切れに食物店を張り段々池上に近くほど其の数を増加したり。又大森停車場より本門寺までの本道も鮎屋、汁粉屋、煮込おでん、煮込牛肉、焼パンなどの店道傍に屋台を並べ、梨柿類の果物を売る者も随分に多かりしが孰れも相応に繁昌したる模様なりし。さてまた参詣人は例の題目太鼓を叩き立て、雲霞の如く本門寺へ押寄せ山内山外はたゞ善男善女を以てひしひしと埋め立て、午後十時の頃及は殆んど身動きもならぬ程なりしといふ。斯る群集の中において彼の立正安国会員の一団は五重塔の階段下に陣を構へ「遊行無畏如師子王」又は「我為日本之柱」など大書したる旗を押立て数十名隊伍を組み、会長

田中智学氏は高祖龍の口法難に付き重野博士を弁駁するの演説をなし、其の他諸講中は何れも万灯を押し立て皆この処ろへ集りたる様宛から昼を欺むくばかりなりしと。本門寺本堂に於ては終夜法会を執行し、寺内釈王殿にては説教等ありて信者は夜もすがら参籠して法会を拜し説教を聴聞し夜明けてよりいづれも帰山することなるが右の群集十中の五六は面白半分遊び半分の連中なれば、題目太鼓はホンの申し訳のみにて帰りは品川へ引かゝるあり、川崎へ寄道をするあり、毎年会式のお裾分には両駅とも随分の賑はひなるが今年は取分け例年に増して善男善女の参詣おびたゞしく、随つて何処から何処まで莫大に潤ひたる模様なり。

●会式桜

池上本門寺の寺中に会式桜といふ古木あり。毎年会式の頃には満開の眺あるに本年は氣候の若き故か未だ二三輪の花を見るのみなりしと。

●して遣られ

日蓮宗の信者、府下多摩郡宮沢村三十二番地小松重左衛門は一昨日の午後、池上本門寺へお籠りに出掛ける道京橋の松田で一猪口遣つて居る、傍に年の齡二十五六職人体の男が来ているいな話をしかけ果は猪口のやりとりまでして懇意になり是から一緒に出掛けやうといふ際、小松は風呂敷包を其処に置きちよいと便所を行つた跡まんまと其奴にして遣られたか、その通りその通り。

明治二十三年（一八九〇）十月十五日朝刊（東京朝日）

●臨時汽車賃

池上本門寺会式臨時汽車十三日の乗客は下等往復八百二十六人此賃銀九十六円三十銭同片道

三百九十三人にして此賃銀二十七円十二錢中等同七十六人此賃銀十円三十六錢×百三十七円零二錢なり。

明治二十四年（一八九二）九月十一日朝刊（東京朝日）

●龍口の難会と見附の裸祭

明十二日明後十三日の兩日は鎌倉片瀬龍口寺にて日蓮上人の難会といふを営むに付、左表の通り横浜藤沢間臨時列車を發す但し雨天なれば差止むる事あるべしと鐵道庁より通知あり。（時刻表省略）

明治二十四年（一八九二）九月十二日朝刊（東京朝日）

●唄ひ女の祖師詣で

今明兩日は鎌倉片瀬の龍口寺に日蓮上人の難会といふを営むことは前号に記したるが、右に付新橋南北の唄ひ女連は真鍮製の大三宝一對を鑄させそれを奉納の爲め寿鶴仙江戸家の三軒が世話人となり、唄ひ女凡そ百二十余名本日午前七時新橋停車場に勢揃ひをなし同時五十五分發の臨時汽車にてドンドコドンドコ押出と。

明治二十四年十月三日朝刊（東京朝日）

●会式

来る十三日は日蓮宗の会式なるより池上本門寺を始め堀の内妙法寺等にては夫々支度中。当日は新橋

より大森まで臨時汽車を發するよし。

明治二十四年十月七日朝刊（東京朝日）

●臨時汽車及び往復切手の割引

来る二十三の両日は池上本門寺会式に付、当日旅客便利の爲め下等往復切手を割引し新橋大森間左記の通り臨時汽車を差出すといふ。

往復切手割引賃金

新橋大森間大人十二錢子供六錢横浜大森間大人二十四錢子供十二錢（以下時刻表省略）

明治二十四年十月十三日朝刊（東京朝日）

●池上の会式

昨十二日は池上本門寺に於て例年の如く祖師の会式を執行するより、市中の法華信徒は早朝より南無妙法の旗万灯等を押立て題目太鼓叩き立て參詣する者其数を知らず。前にも記せし通り新橋鐵道庁よりは爲に臨時汽車を發し信徒の便に供したるより同停車場の混雜一方ならず。愛宕下警察署よりは臨時に巡查を派して拘摸その外の取締をなしたる程なりといへば夜に入りては一層の群集を極めし事なるべし。

明治二十四年（一八九一）十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上本門寺会式の景況

一天四海皆歸妙法。お有難連の善男善女十方より群参し一昨夜の賑はひ筆紙の尽くすべきにあらずトまづこれ丈にして二百五六十行の手間を省き数万個の活字を休養するも偏へに妙法の大功力に南無。

明治二十五年（一八九二）九月十二日朝刊（読売）

○横浜片瀬間の臨時汽車

今明兩日は相州片瀬龍口寺の御難会に付、当日は横浜・藤沢間に左の臨時汽車を發するよし時刻表省略

右に付新橋發午前九時及び午後一時十分の列車に乘車すれば横浜より午前十時及び午後二時三十分の臨時汽車にて行く事を得べく、且横浜にては十二・十三兩日通用の横浜・藤沢間下等往復切手を發売するとのことなり。尤も当日雨天等の節は臨時汽車出發を差止むる由。

明治二十五年十月二日朝刊（東京朝日）

●会式と臨時汽車

来る二十三日の兩日は池上本門寺の会式に就き、鐵道庁に於いては新橋大森及び横浜大森間の臨時汽車を發し又当日に限り下等割引往復切符を發売す。其賃金は左の如し。

新橋大森間（下等） 大人十二錢 小兒六錢

横浜大森間（同） 同二十四錢 同十二錢

明治二十五年十月十一日朝刊（東京朝日）

●新橋、大森間の臨時汽車

明十二明後十三の両日は池上本門寺会式につき鉄道庁にては新橋大森間に左の臨時汽車を運転する由（時刻表省略）

明治二十五年（一八九二）十月十三日朝刊（東京朝日）

●お会式

一天四海皆歸妙法。昨十二今十三の両日は池上本門寺、堀の内妙法寺の会式にて例年の如く法華信者は浪の如く潮の如く題目太鼓たゝき立て押出すものおびたゞしきより、予て鉄道庁にては信者に利便を与ふる為め横浜大森間及び新橋大森間に臨時汽車を差立ること、したるが、昨十二日は午前の中だけ澁々ながら持こたへ正午頃は如何やら晴模様なりしにぞ混雑せぬ中にと參詣を急ぐ信者連の足取は中々盛んなりしが、無残や午後二時頃より又雨となりたる為め本當の信者の外面白半分の參詣人は一寸見合せ気味となり、汽車の乗客も意外に多からざりしとのことなり。尚昨日午後よりの会式の景況は次号に記載すべし。

明治二十五年十月十四日朝刊（東京朝日）

●お会式

一昨日午後に於る会式の景況は無残や雨の為め台なしになり、新橋より大森への乗車客の如きは僅か

に七千人これを昨年の客数に比すれば殆んど三分一位なりといへば本元の池上の方も推して知るべく。何処も彼処もたゞ雨と共に大溢し。

明治二十六年（一八九三）九月九日朝刊（東京朝日）

●御難会

来る二十三日の両日は鎌倉片瀬村なる龍口寺の御難会にて法華信者は争ふて参詣するより鉄道庁にては横浜藤沢間の臨時列車を差立つ。

明治二十六年（一八九三）九月十日朝刊（東京朝日）

●御難会の臨時汽車

来る二十三日の両日横浜藤沢間臨時発汽車時間は左の如し

横浜発（下り）藤沢発（上り）

午前午後 午前午後

六時二十五分 二時三十分 七時三十五分 十二時五十五分

八時四十六分 九時三十分 三十五分

十一時五十分（新橋迄直行）

右の内、十三日には下り午前六時二十五分、上り午前七時三十五分ののみ運転する由。

明治二十六年十月八日朝刊（東京朝日）

●臨時汽車

例年の通り本月十二十三の両日は池上本門寺の会式に付き新橋大森間に臨時汽車を仕立て左表の時間を以て運転す。（時刻表省略）

明治二十六年十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上御会式の景況

九万三千七百二十七字を只の七字に縮めたる妙法蓮華の功德は今も衰へず、池上本門寺の御会式は一日より昨日へかけてぞ行はれける。新橋停車場にては予て本紙に記した通り、一昨日午前六時十五分より三十分毎に汽車を出し山と寄せ来る参詣人を柵もて量る客車の雑踏盛りはよけれど載せ切れず。先を争ふ気早の信者前なる人は頭を飛越え横なる人は突飛し身材の高きは股より潜り低きは下へ座し潰し死身に成て道を急ぐは餓虎肉を見て飛び行くよりも鋭とかりける。駅吏は予じめ此事あるを慮かり場外の車寄、場内の雑貨売店及び東海道行出札所の三ヶ所に大森行出札所を設けたけれども、夫にても人は左までに便利を感じず。芝警察署よりは特に警官十数名を派して非常を戒め予ては掏摸の跋扈を防ぎぬ。品川停車場も雑踏をさゝ、新橋に譲らず、午後よりは乗り切れずして次便を待つもの少からず、新橋より金杉高輪を経て品川へ行く路々も人ならぬ所絶てなく題目の声太鼓の音、飴屋の行列に異ならず、品川の貸座敷昼間は左までにあらざりしも夜に入りては信心かこつけに落ち来る客の少なからず、振られて一人床の番飛だお通夜をするもありけり。大森停車場は新橋品川及び横浜の方よりも来る客を一手捌き

の吐き口なれば、汽車の来る度数千の人の動揺めく声、奈落の鬼も耳をや潰さん。車で歩行を来る人さへ道行く人の邪魔なるに、見上る計りの大万灯に人の頭を撲つを構はず曳々声で押し行くあり隊を組むあり手を引くあり、題目太鼓の音に和して酒興に乘じ怒鳴るあり。人の出盛る午後三時頃の有様と来てハイヤ早や筆も口も及ばず、一九や三馬を地下に起して見せたい様なり。大森より池上に至る間は宛ながら人を以つて土手を築きしに殊ならず、此上を足駄をはいて歩かんとは頭を踏れて痛い々々といふ声が老若男女の別あつて面白からんと思はれたり。さて又本門寺の境内は飲食店見世物小屋などにて地を狭めたる其上に数万の群衆を入れたれば、其の雑踏眼も当られず。釈迦堂、祖師堂は供物美々しく飾り立て、冥府の浄土此の世まで転居をしたかと疑はれ、説教所には夥多の名僧代わる代わる南瓜頭を振廻して枯野の蟲の声涸れゞゝとなるを厭はず、題目の声団扇太鼓の乱調は昼夜を分たず息を休めず。午後六時頃には雨ポツ、と降出したれば真の信者にあらざる外は皆散々と帰路を急ぎ、夜の十時頃に至りては雨稍強くなりたれば雨具を持って主人を求める長松もあり、寒げた裾の色模様あかの他人に傘着せられてお夏の二の舞を踏むもあり、其の混雑も並ならず。同日新橋停車場にて売出したる臨時汽車の乗券は中等三百人下等一万二千二百人合計一万五千人にして此外通常汽車にて往復したる乗客を算すれば猶幾千人を増すなるべし。又同日品川警察署にては池上村々役場を出張所に充て沿道各所を警護したるに拘摸犯見込にて拘引せし者六十五名（内婦人一名）あり、昨朝に至り罪状判然せしもの二十二名ありといふ。昨日は池上にて通夜せしもの堀の内のお祖師様へ巡る日なれば同所の賑ひも大方ならねとくだけなければ事省ぎぬ。看人人幸ひに推し玉ひねと記者も時々気取る奴さ。

○新宿午込間開業式と臨時列車

甲武鉄道会社（中略）尚同社は来る十二日十三日池上本門寺の会式には臨時汽車を發する由なるが是亦乗車賃半額の日限中に付必らず非常の人出なるべしと。

明治二十七年十月十一日朝刊（東京朝日）

●池上本門寺会式の臨時汽車

明十二日は例の池上本門寺祖師の会式に付、信徒參詣人の便利を謀り鐵道局にては新橋、大森、横浜の各停車場より左の時間にて臨時汽車を發す。

又十三日に限り左の臨時汽車を發す。（時刻表省略）

明治二十七年十月十四日朝刊（東京朝日）

●御会式の景況

一天四海皆歸妙法。お題目の大なる祖師の高徳は末世末代の今に至っても衰へず、一昨日は即ち池上本門寺の御会式の当日とて年々歳々人心は同じからざれど、年々歳々相似たる盛んなる景況の其一般を記さんに、新橋停車場にては場内なる貨物販売店を臨時出札所となし、又大森停車場にても場の両側に
出札所二三ヶ所及び改札所を設け何れも乗客の便利を図りたるが、此日朝來快晴なりしも正午稍や前かたより空合思はしからずなりたるにも拘はらず停車場の混雜實に名状すべくもあらず、然れば汽車の着する毎に大森停車場より池上道三四丁の間に人と腕車を以て埋められ進むも退くもならぬ程なりしと

ぞ。さて此雑踏も午後四時頃より一時途切たれど夜に入りてよりは例の如く万灯を照し団扇太鼓を叩き大声妙法蓮華経を唱ふるもの幾組となく群衆に混りて、其賑ひ昼に倍して最殊勝にぞ見えける。ここに可笑しきは其群の中に喇叭を吹きつつ練行きしもありぬ、祖師果して御満足せらるるや否や。又境内は種々の見世物、種々の商人所狭まで見世を出し或は日清戦争などを節面白く唄ふ読売り、時節柄に叶ひしは是れのみにもあらずして、山門前なる稲荷堂の前に寒冷沙を張りたる三尺に四尺ほどの掛額に平壤の遠見と清国軍艦沈没の図とを描きたつものあり。猶此外にも提灯にて支那人の切首に見せたる趣向などのありしは微に敵愾の心を起さしめんとての企てにや。又品川警察署にては同日より同夜へかけ掏摸二十三名拘引し、其内八名は目下取調中にて其余は残らず昨日の朝放還せられたるが、斯く注意の行届きたる陰にや例年に比し盗難又は遺失等の事は皆無の姿なりき、又或る人の曰く万灯の出方は例年より頗る尠しと好く氣をつけたものなり此外は略す。

明治二十七年（一八九四）十月二十日朝刊（東京朝日）

● 頓死人の義捐

池上御会式の当日本門寺境内にて下谷区徒士町一丁目二番地古物商高山由次郎と云ふものが頓死せし事は其時の紙上に記したるが、右につき同寺の方丈某は棺代として五十銭を義捐し、又同寺境内及び近傍に見世を張る商人達は一軒に付一銭づつを出したるに其金額四円三銭となり夫を由次郎の遺族へ香典として送りたるよし。

明治二十八年（一八九五）十月十一日朝刊（東京朝日）

●お会式の臨時汽車

明十二日は池上本門寺のお会式に付き、鉄道局にては参詣の善男善女の便利を図り当日（十二日）及び翌十三日に限り左の時刻を以て新橋及横浜間に臨時列車を發せらる。

十二日新橋發 同日横浜發

午前八時二十五分 午前九時十五分

同十一時二十分 同十時五十分

午後十二時十分 午後十二時二十五分

同二時 同二時十五分

同三時四十分 同三時五十五分

同五時二十五分 同五時三十分

同七時五十分 同七時四十五分

同九時二十分 同九時三十分

十三日に限り新橋發 同日横浜發

午前六時四十五分 午前五時

明治二十九年（一八九六）十月八日朝刊（東京朝日）

●お会式

堀の内の妙法寺は来る十二十三の両日为例のお会式にて、参詣の諸講中も各神社の祭り同様例年より張込んで万灯を立派にするとの事なれば、寺内にも相応の準備なかるべからずとて昨今専ら支度中。

又雜司ヶ谷の鬼子母神にてもお会式を執行する由にて目下支度中。

明治二十九年十月十日朝刊（東京朝日）

●官線百回の運転

先月一日より新橋神戸間は毎日八十回の運転をなし来りしが来十二、十三兩日は池上本門寺法会式執行に付、京浜間に臨時汽車を發し一日百回の運転をなさんとす。右は本邦鉄道創設以來最多の運転なれば、主務省にては予め各駅員へ注意する所ありき。

明治二十九年十月十三日朝刊（東京朝日）

●池上本門寺会式の景況

一天四海皆歸妙法。有難くも亦陽氣なる日蓮宗の信徒等が毎年狂氣の如く立騒ぐ昨日の会式の景況を聞くに、天氣も殊の外朗かなりしかば雑沓する事大方ならず。新橋停車場にては三ヶ所に「大森行切符販売所」を設け、品川停車場にては同じく一ヶ所を設けて乗客の便利を謀りぬ。左れば品川警察署は嚴そかに非常を戒めんとて大森停車場、池上村、本門寺山門下旧憲兵屯所跡等へ出張所を設け尚參詣道の要所々に巡查を配置せり。貴賤老若群集のありさまは例に依て例の如くなれば別段記すべき様も無けれど、汽車の發着毎に人波を打つ様子を見れば又今更に舌を巻くばかりなりし。扱本日は会式の当日なるを以て稚児なども出づると云へば尚一層賑はふ事なるべし。

明治二十九年（一八九六）十月十四日朝刊（東京朝日）

●お会式の景況

一昨日の概況は既に昨日記載せしが今又其の詳細を記さんに、一昨日午後の人出は十年以降曾て見ざるほどの人出にて、新橋停車場にては一列車毎に乗客乗せ切れずして余す事始めは其三分ほどなりしが後には殆んど其の半数に及びたれば場内の喧噪一方ならず。改札所は切符を切るに暇あらず已むを得ず切らずして乗車を許したるが、かゝる事は曾て無き事なりと云ふ勢ひ斯の如くなれば警官も余程骨折の体に見えたり。高輪品川をかけ徒歩にて行く連中は例の万灯を樹て団扇太鼓を鳴らし一団又一団連綿として引きも切らず大森停車場は着車毎に乗客の呐喊天地を動かし殆んど火事場の観あり。夫より十丁ほどは車の往来を許されたれど其先は許されず車の通ふ間も危険を極めたり。山内には見世物小屋露店例によつて蜘蛛手かくなは万字巴に入り乱れ本堂の回廊より見渡す時は只一面の人の浪或は怒り或は逆捲き千様万態名状するに暇あらず。池上村の浄国橋より山門下及び山内へかけ張り並べたる諸種の露店は其数三百五十余軒、新井宿より山門下までの枝柿と栗との見世は凡そ百二十余軒、山内の本堂前に万灯を樹て並べ徹夜のおこもりをしたるは府下の八講、横浜の十講、其他近郷の諸講及び飛入連などなれど、今年は人数殊に多く夜半に至りても人の散りしやうには見えざりき。昨日午前八時頃より雨降いだしたれば下向の者困難を極め、予て此事あるを知りて大森辺まで出掛たる車夫は不時の大儲け。品川高輪辺とも一時車の出払ひて途上隻影を止めざりし。寺内にては昨日午前法要の際東京八講より寄付の稚児練りと奏楽とを催したれば、囀唳たる音楽衆生の心耳を澄まし天上花降るかと思はれたり。かゝる盛況の中にてひとり哀を止めたるは或る老婆が山内にて卒倒したるまゝ、蘇生せざりし一事なり。

明治三十年（一八九七）十月七日期刊（東京朝日）

● 雜司ヶ谷鬼子母神の会式

北豊島郡雜司ヶ谷の同寺にては明八日より二十三日まで祖師の会式を執行するに付、同所表門前の花園講中より境内へ日蓮上人一代記の生人形を奉納したるが、四谷牛込小石川等の各講中にては飾万灯を拵へ盛に参詣すると云ふ。

明治三十年（一八九七）十月十一日期刊（東京朝日）

● お会式と臨時汽車発着表

明十二日は池上本門寺のお会式なるが、府下荏原郡中の各村は三多摩郡に次げる赤痢病流行の土地柄なるを以て、品川警察署は更に郡役所に交渉し各村長をして此際成るべく各鎮守の祭典執行を見合はすべき旨伝達せしほどなれば、一年一度の同お会式も或は一箇月延期するといふ、又居見世のみにて他より飲食店又は路上の見世張等を差止められたりとの噂ありしを以て、品川署に就き事実を問合せたる所同署にては延期又は見世張等を差止めたることなしといふされば、同日は例年の通り参詣人夥多しきとなるべきか。鉄道作業局にては参詣者の便を図り十二十三の両日は京浜間に左の時刻を以て臨時汽車を發す（時刻表省略）

又新橋大森間及び横浜大森間は例年の如く往復切符を發売す。

明治三十年十月十三日期刊（東京朝日）

●池上お会式の景況

予記の如く昨日は池上本門寺のお会式にて昨朝は晴天なりしかば府下は更なり近郷近在より追々と繰込む老幼男女ひきも切らず午前十時頃微雨ありしにもめげず各停車場の雑沓混雑一方ならざりしが夕暮よりの雨に慌て惑ひし群集の光景は見るも中々気の毒なりし。

明治三十年十月十四日朝刊（東京朝日）

●本門寺のお会式彙聞

前号の紙上に大要を掲げたる一昨日の池上本門寺お会式の景況を記せば左の如し

△お会式と雨

去二十六年現今の住職鷄溪日舜師が本門寺の住職となりて以来お会式に必ず降雨あるは不思議なりと説く者あり。すでに一昨日も参詣人の出盛る午後二時半頃より雨となり次第に劇しく降りそ、ぎ夜十時過までも降り止まざりしかば、参詣したる老幼男女の業洩いふばかりなく雨天となりてよりは道路も山内も雨傘と蝙蝠傘と相接して宛も傘もて天井を造れる小隧道の如くにてありしにぞ。傘なき人は傘と傘の間を潜り行けば少しも濡れずして歩行し得るなんと最奇観なりき。

△雨傘の売切れ

前記の降雨に傘を準備せざりし人の狼狽大方ならず。如何にせましと彷徨く中に池上村大字堤方に一軒の荒物店あり。同家の店先に三四十本の大黒傘吊しあるを発見したるより人々蟻の甘きに集ふが如くわれもわれもと同店へ群れ寄り一時間ほどにて残らず売切れとなれり。

△参詣人の種類

第一種即ち午前中に参詣したる信者には芸妓、外妾、料理茶屋待合等の雇女極めて多く、第二種即ち正午近くより午後三時頃までには諸講中に加はらざる独立の参詣者（この中には野次馬信者多し）と見受けらるゝが多く、第三種即ち夫より夜に至るまでの参詣者には諸講中（此中にも野次馬極めて多し）の信者其重なる者にして、此連中は威勢よく万灯を押樹て例の団扇太鼓に唱へる法名の拍子を取りつゝ、繰込みけるが、連中には若者あり老人あり婦人小兒もありき。尤も右の降雨にて折角諸講中が苦心に成りたる万灯は忽ちに濡れ破れ、夜に入りて山内へ持込みたる万灯中全形も存せるは一つもなかりき。

△鉄道役員の欠伸

一昨日は此降雨にて人出思はしからず、且午後三時過よりは滅切減少しければ折角非番総出にて腕を扼ぱり力瘤を入れて待構へし各停車場の役員等も意外の閑散に苦しみて欠伸を嚙つ、侘立み居けるが、夕暮前には大抵駅長より帰宅を許される以て夜中の一班を推に足るべし。

△掏摸

其筋の警戒行届ける結果として掏摸と思料せらるゝ者十七八名も引致されしが盜難遺失の訴届は一件もなく右の十七八名も証拠不十分にて昨朝放免せられぬ。

△雨の品川

一昨夜の雨にいつそ濡れるならと品川へ浮れ込み、お祖師様の代りに正真の普賢菩薩を拝みまつれる連中も大分ありしとぞ。

△人力車の通行止

例年正午より池上松葉館の入口より先は人力車の通行を差止め居りしが、本年は一昨日午前十時頃、三田小山町井上角五郎氏の妻君が老母と二頭立の馬車に合乗りして狭き道繋ぎ往來を一切構はず本門寺

の門前まで乗り付けたるより、斯くて負傷者等を出ださば由々しき事なりと其筋にては直ちに人力車の通行を禁じければ、車夫連中は大こぼし

△臨時汽車の収入

一昨日中新橋大森間の乗客は往復とも一万六千五十七人此賃金一千九百円余に及びたりとぞ。

明治三十年（一八九七）十一月十二日朝刊（東京朝日）

●東京座劇評 東婦坊

一番目日蓮記、此狂言は昔より不入続きの劇場にて出すものなり、夫をいつでも客を呼ぶ出口が出ず事として池上本門寺の石坂を叩いて昇るやうなもの、殊に講中の子供を借りるなど至れり尽せりといふべし、評者は逃れぬ用事ありて一番目を勿体なくも拝見致さず残念々々、併し本門寺会式の見たり、実に演劇とは思はれず忝けなさに涙こぼるる心地せり、（以下省略）

明治三十一年（一八九八）十月十日朝刊（東京朝日）

●御会式と臨時汽車

来る二十三日の両日は池上本門寺の御会式に付き、鉄道局にて参詣人の便利を図り左の時刻を以て新橋、横浜間臨時列車を運転し新橋、品川、神奈川、横浜の四駅にては大森への往復切符を発売すとなり。

（時刻表省略）

明治三十一年（一八九八）十月十三日朝刊（東京朝日）

●各所会式の景況

池上本門寺の御会式ほど世に賑はしきものはあらず。諸講中或ひは団扇太鼓を叩き或ひは万灯を押立て同寺を指して詣上るもの、汽車ともいはず街道ともいはず絡繹として引きも切らねば此日こそ一天四海皆妙法に帰せしかと疑がはる、なれ。昨日は其お会式の当日にて昨年は雨天なりし為人足左までに多からざりしが、本年は打て替りし上天気空には一点の雲の障りもなく人は何事を置いても会式に加はらん事を望み其雑沓一方ならず。新橋、大森及び目黒の各停車場にては掛り員を増して混雑を制し、所轄警察署は巡查を派して警戒怠たりなく本門寺の境内外松葉館の辺は例年の通り人力車通行のを差止めしが、其附近は只一面人を以て埋むる許り觀世物諸商人は声を枯して客を呼び、芸者落語家待合遊女屋等の延喜家は本堂前に額きて商売繁盛を祈るを見受けたり。

又北豊島郡なる雑司ヶ谷鬼子母神も山門外より境内にかけ觀世物小屋及び諸商人の露店互いに寸地を争ふ光景にて、各講中は一昨夜よりおもひおもひの飾物又は造花附の大万灯を持込み、昨日は午前中より雑沓し午後一層群集して門前の茶屋むさし屋を始め其他の飲食店とも午後二時頃には立錐の地もなきほどの客来あり。板橋署よりは取締として警部巡查数名取締として現場へ出張せしが「おこもり」と唱へて堂宇内に寝泊りする事は予て其の筋より厳禁しあるを以て、一昨夜は一同お通夜と称し徹夜題目を唱へ太鼓を打きて夜を明かせり。

堀ノ内村の妙法寺も去る八日より例年の如く会式を執行し、殊に今十三日は池上本門寺又は中山鬼子母神等のコボレが押かけ例年非常に雑沓する事なるが、昨日までは尚池上中山等の如く雑沓せざりき、されど同所の信衆其他の各飲食店にては臨時下女を雇入れて各講中を待受け居たり。

千葉県の中山法華寺も汽車を利用して参詣する人頗る多く、為めに本所停車場は相応に雑沓せり。同所は有名のご刹なれども従来不便なりしかば婦人等の参詣者は極めて少なかりしが、本年は汽車の便ありてわざわざ出掛けし者を多く見受けたり。

明治三十一年（一八九八）十月十四日朝刊（東京朝日）

● 会式の夜景と其他の遺聞

昼の分は昨日の誌上にあり、今まづ池上本門寺の夜の景況より記さんに昨年は午後二時より大森の八景坂以内へ人力車の通行を差止めしも警戒の寛大なりし為め其効なく車夫等は勝手に入込みしより、本年は午前十時より厳しく取締りしを以て参詣人は大に便利を感じしが一昨十二日は夜に入るまで团扇太鼓の響なく山内なる虎の間の玄関前にも夜に入るまで一本の万灯来らず、斯くて漸く夜に至れば芝若の「陀羅尼開仁」と記したる万灯を最先に諸方結社の万灯幾十本信徒の者に擁せられつ、闇路を照して進み来り。其と同時に团扇太鼓の音題目の声喧しく聞え、或は空銅壺を打ち或は喇叭を吹鳴らして其賑しき事混雑なる事昼とは全く打て変れる光景となれり。さる程に同夜十一時過ぎまでも斯る有様にて陸續本山へ練込みし事なれば山上の雑沓実には名状すべからず満山ほとんど人を以てうづめられ万灯を樹つべき余地もなきほど、なりければ是非なく持帰りたる講中も見受けたり以て如何に其人出の多かりしかを想像し得べし。同日は前号の欄外にも記す如く六年目の好天気なりしがこは予て敗徳汚行の醜聞を流せし同寺住職鷄溪日舜が去る十日を以て他に転じ、以前同寺の住職たりし中山法華経寺の住職久保田日龜氏が再び代りて住職となれるを以てなりと信徒中には真面目に説く者のありしも可笑し。其はさて置き右記す如き多数の人々は例年夜の十二時頃ともなれば徐々山を下りて家路に就く習ひなるが、本年は如

何にしけん昨晝四時頃まで帰途に就く者殆んど無く、随つて山内及び附近沿道の諸商人は実に意外の収入ありしとて喜び居たり。聞く所に依れば此会式に付芝罘へは一の盜難其他の事故の告訴なく唯品川停車場の待合にて乗客の一人が羽織を一枚攫われしのみなりし由。又品川署の臨時出張所に迷子二人ありしも親許判明したれば昨日引渡し、其他には腹掛の并を切取られて金五円ほど掏られし他には告訴なかりき。尤も掏摸の嫌疑にて一時出張所へ留置きし者二十余名ありしが昨朝いづれも放還せられぬ。今日日の鉄道乗客と及び其収入を聞くに新橋駅は定時の駅員にて取扱ひし大森往復の乗客一万人、単に大森行の乗客一万百八十八名此賃金二千四百四十二円八十七錢にて昨年と比し実に七千人の増加なりといふ。又品川大森の両駅にては鉄道作業局より臨時に鉄道工夫十数名を借り入れて使役せしが、同駅より大森への乗客は九千四百八十五名此賃金六百四十二円二十四錢又同駅にて下車せし。六千六百三十三名昨年に比すれば殆ど三倍にて同駅創立以来の乗客なりしといふ。次に大森駅よりの乗客は一万四千九百十二名にて此賃金九百六十一円二十一錢なりしが昨十三日は京浜を始め近郷近在の信徒猶も朝来続々参詣者ありき茲に一昨夜の出来事ともいふべきものを記せば、同十時頃飯倉片町の若衆講一名ノンキ連の一隊三十余名が本山より万灯を囲みて停車場近く来掛りし際、麻布永坂町の永坂結社講の一群十五六名と衝突し双方忽ち入乱れて奮闘しノンキ連は一方の万灯を打壞して微塵とせしが往き返りの参詣人多き為め喧嘩は忽ち押潰されて物分れとなれり。因に記す昨日午前十時頃までに本門寺より品川駅まで還り来りし二千名ほどは更に赤羽線に乗替へて堀の内へ赴きたり。

北豊島郡雑司ヶ谷の鬼子母神も一昨日午後六時頃よりは目白停車場より下車したる草鞋連多く押寄せ、昼よりは一段景気づきしがやがて山の手連なる第三方面四番組の消防連が纏形なる大万灯を持込みしを始めとして太鼓の音題目の声すさまじく老幼男女夥しく押しかけこも昨晝まで非常に賑ひたり。

唯し其筋の警戒行届きし為め記すべきほどの事故なかりき。

堀の内も大概大同小異なれば略して記さざるが、同所へは昨夜各講中万灯おしたてお通夜に赴く旨其筋へ届出ありしも同日は朝来空掻曇り折には村雨ありしかば各飲食店及び露店商人等は孰れも空を眺めて溜息吐きぬたり。

明治三十一年（一八九八）十月二十八日朝刊（東京朝日）

●本照寺の会式

品川北馬場の日蓮宗本照寺にては昨今両日会式を執行すると云ふ。

明治三十二年（一九九九）十月十一日朝刊（読売）

○池上本門寺会式と臨時汽車

明十二三の両日は例年の通り同寺にては会式を執行するに付きて参詣人の便利を計り鉄道局にては十二日に新橋川崎間往復新橋横浜間上り八回下り九回十三日は新橋川崎間上下各二回新橋横浜間下り一回上り二回等にて新橋発車時刻は左の如し（時刻表省略）

明治三十二年十月十一日朝刊（東京朝日）

●会式と臨時汽車

明十二日は池上本門寺の会式につき鉄道作業局にては明、明後の両日新橋横浜間に臨時汽車を發し、

尚三等乗客に限り新橋大森間及び横浜大森間二日間通用の切符を発売する事となれり其発着時刻左の如し（時刻表省略）

但し両日とも雨天或は乗客の寡少なる時は運転を取消さるとありと。

明治三十二年十月十四日朝刊（東京朝日）

●会式の景況

前号にも一寸其景況を記せしが尚一昨夜より昨日に至る各所の景氣を報ぜんに、年年歳々万灯の花相似たれどお参籠の人相同じからず、本年は余程淋しき方にて池上本門寺も参詣者は先づ昨年のお四分の一なり去れど其筋にては同夜の雑沓を予想し例年になき注意を加へ、本門寺門前より一條の綱を道路の中央に引き左方を往、右方を復として混雑を制し、人力車は例年門前にて止めたるも本年は門前より太鼓橋を経て山門に入り本堂前まで終夜通行せしめたれば老人婦女子は大喜びなりし。其外諸所にビヤホールの設けられしは目新らし。さて夕刻より夜に入りて雨降り出でしかば一時は非常の混雑となり殊に道路は忽ち泥濘となり暗さは暗し、参詣者の困難一方ならざりしより例の井桁に橘の紋附けたる小提灯を買ふもの頗ぶる多く、提灯屋は思はぬ利益を得たり。斯る次第にて夜は一層の淋しさを招き飲食店諸商人及び観物等は収入少なく大外れの模様なりしが、昨朝は会式を執行し稚児奏樂などあり。天氣も前日に引替へて晴朗なりしかば人出俄かに増して新橋停車場には別に大森行きの出札場を設けしが尚非常の雑沓なりき更に堀の内妙法寺の景況を見るに此処も一昨日は天氣悪しかりし為め景氣宜しからず。甲武鉄道は飯田町中野間の列車を増発し和田堀の内村の鍋屋横丁より妙法寺に至る田圃道は高張提灯を点じて各講中の万灯など飾り附けたり。去れど雨天の為め池上より廻るものは至て少なく御参籠の酔興

人も常よりは張合抜けし気味なり。名物の漬物、掘出し煎餅など売行最もよく柿は高値のため差合ながら渋谷買ひ行きたる人のみなり。料理店は大蔦を第一として梅本之に次ぎ名物の信楽は仮普請のままにてさしたる繁昌も見ざりしといふ。又雑司ヶ谷村の鬼子母神も前日は一層寂寥として田圃道に人影を見ざる程なりしが、昨日の好天氣に盛返して堀の内を兼ねて参詣する人多く目白停車場は中々の混雑にて警官出張して取締りをなし居たり。尚スリの捕はれしもの前記各所に十数名あり。

明治三十三年（一九〇〇）十月九日朝刊（東京朝日）

●会式の臨時汽車

来る十二、十三の両日は既記の如く堀の内祖師の会式なるを以て甲武鉄道会社にては参詣人の便利を図り、新宿止りの汽車を中野まで延長す。其時刻は左の如し（時刻表省略）

又池上本門寺にても夫々準備中なるが、同所門前近傍の貸見世は間口二間奥行九尺の賃料三円五十銭以上七円又奥座敷二間位にて十五円以上にて既に昨日より露店商人の地割に着手したりといふ。

明治三十三年十月十一日朝刊（東京朝日）

●会式と臨時汽車

既記の如く明、明後の両日は池上本門寺の会式にて、信仰の者も然らざるも皆妙法と標せし万灯の下に帰して団扇太鼓を叩きつつドンドンと参詣に出るが習ひなれば、京浜両停車場にては是等の者の便を図りて特に左の臨時汽車を發する由。但し当日雨天にて乗客余り多からざる時は其全部又は一部の運転

を取消す筈なりといへり（時刻表省略）

明治三十三年（一九〇〇）十月十二日朝刊（読売）

○堀の内村妙法寺の会式

豊多摩郡和田堀の内村妙法寺は今明両日会式に相当すれば参詣人も例年の如く夥だしからんとて甲武鉄道にては臨時飯田町より中野間へ発車すと。

明治三十三年十月十三日朝刊（読売）

○交通雑聞●昨日の新橋停車場

池上本門寺の会式は昨日より始りたれば朝来新橋停車場は善男善女の人波を打ち新旧二ヶ所の出札口を利用して切符を売り居たる有様却々の雑聞なりし。

●池上の会式と八王子の十夜会

荏原郡池上本門寺の会式は例の通り昨朝来非常の出入を的込み、掏摸等は学生又は請負師乃至田舎者に扮し数名新橋大森両停車場或は本門寺境内に入込みし模様につき警視庁は特に数名の刑事を派遣し、又今十三日より三日間八王子十夜会に付き掏摸入込みの為め本日警視庁巡査と応援として出張せしむるといふ。

明治三十三年十月十三日朝刊（東京朝日）

●池上本門寺の会式

一昨夜来より万灯を押立て団扇太鼓を囃立てて景気をつけ居たる法華講中及び町内の若者連は尚夜中に池上本門寺に押出したれば、昨日は曇天なるにも拘らず善男善女雲霞の如くに新橋停車場へ群集し、例に依て発売せらるる往復切符を求めんとて出札口に揉合ひ同停車場は頗る混雑を極めたり。又品川停車場に於ても警視庁の刑事等出張となりスリ二人を取押へて衆人の盜難を防ぎ、大森停車場に於ては西側二ヶ所の札売場を作り夜中は気発油の瓦斯大柵等を設け、道路の両側には諸商人店を列べたる等中々に盛昌したるが参詣人には待合の女将諸芸人等を多く見うけたり。因にいふ引続き堀の内の祖師赤坂一ツ木町圓通寺の祖師開帳なれば露店商人は夫々手配中なりとぞ。

明治三十三年（一九〇〇）十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上堀の内会式の細況

仏法も末となれば商法と変りなく、六字の名号七字の題目或は九字の真言も皆是れ登録商標の四字に等し去れば本山の暖簾は講中のお引立によりて繋ぎ、末派の看板は信徒の信用によつて保つ。丸い頭の番頭手代も在家よりは如才なく客を外さぬ説法上手に得意はますます殖えるばかり。実に繁昌の光景は一昨日のお会式にも現はれたり、昼の賑はひおよび夜に入りて雨中の景況は前号欄外にも記したるが、恰も午後七時ごろより小雨振り出し今を出盛りの参詣人の混雑は云ふに及ばず、飾り立てて繰り込む万灯限りなく田圃道に列なりて孰れも雨に晒されしより紙破れ灯火消えて初めの勢ほひ何処へやら、太鼓の音も力なく拍子の抜けし如くなり。斯る中にも雨はいよいよ本降りとなり大森停車場の辺は押返へされぬ雑沓にて行くもの返るもの入乱れ荒物屋の大黒傘は忽ち売り尽して亭主の顔もニコニコもの、露

店の柿は（判読不能）老若男女堂内に充ち溢れて雨中に佇ずみ軒下に迷ふもの夥しく一夜のお籠りを濡れそぼちて明かせしあり。諸講中は寺院茶店等に陣取り門前の鮎店汁粉屋等は殆んど売切れの姿なりき。其際山内にありし血塊の観物は下谷区西町一番地鈴木治右衛門（二四）同竹町十三番地高安千代（三七）両人の持にて印度産の小猿を血塊と称し諸人を醜着したる事現はれ直ぐに営業停止となり又下谷区根岸町十四番地宮内金蔵（十九）外五六名のスリ捕はれたり。

雑司ヶ谷鬼子母神の会式も午後四時頃より漸やく講中の押寄せるもの多く、やがて雨となるや此処も同じき雑沓にて、門前の茶店は人の山をなし客待の人力車は値に構はず出払ひて婦人連は困難を極めたるが、殊に年若の外国人二名が車なき為め例の尾花の木兔を肩に雨中を冒し行きたるは氣の毒に見受けたり。

又堀の内妙法寺は昨今両日とて池上、雑司ヶ谷等より廻りたる参詣人多く、新宿中野各停車場及び飯田町停車場等は朝来非常の雑沓なりしも、当所は池上と違ひ万灯太鼓の附景氣は至つて少なく、信心一方の参詣なれば雑沓の割合にいと静肅なり。尚昨朝は空模様快かりし為め堀の内を兼ねての参詣者ありて池上も中々の賑はひなりき。

明治三十三年（一九〇〇）十月十四日朝刊（読売）

●停車場の見聞 ●本門寺会式と汽車の乗客

一 昨日池上本門寺の会式に付き、新橋より大森間の往復旅客は一等百二十八人、二等二千五百四十八人三等三万二千五百十四人計三万五千百九十人なり。

明治三十三年十月十五日朝刊（読売）

●雨降りの会式と釣り

池上の会式又は昨日の柴又帝釈縁日は降雨の爲め其治道なる商家は大に損害を受け、特に同日は日曜休暇にて大川筋及び台場附近の沙魚三枚洲辺のメゴチ釣りにて各釣舟業は先月中より一舟残らず約定済のところ之も降雨の爲お生憎が多かりしといふ。

明治三十四年（一九〇二）十月十一日朝刊（東京朝日）

●池上の会式と臨時列車

明十二明後十三の両日は池上本門寺の会式に付、各講中のうち今夕より大万灯を真先に団扇太鼓の音勇しく本門寺に繰込む尚も多く諸商人は目下治道の出店に忙はし。また官設鉄道にては新橋横浜間に臨時旅客列車を運転し三等客に限り新橋大森間、大森横浜間に往復切符を発売する由にて新橋発の時間は左の如し（時刻表省略）

明治三十四年十月十二日朝刊（東京朝日）

●池上の会式

本地四八の法の門本門寺と聞えしは府下荏原郡池上村にあり。祖師日蓮垂迹の霊場として法灯瓶焉無期に及び毎年会式執行の砌には、各講中は勿論信徒に加はれる者も然らざるものも争ふて参詣に赴むき、境内境外人充満て宛然一天四海皆妙法に帰したらんかと思はるるは今更めかして記するに及ばざる

べし。本年の会式は実に今明両日に当り幸ひ天気も定まれるのみならず、同寺は去る三月の火災以来各講中信徒よりの献金二十三万円を工費として新築に着手し既に間口七間奥行十五間の方丈茶の間を落成せしめられたれば、百二十余の講中の者は奮つて参詣に赴むべく信徒男女も数多群集すべきを以て同寺にては新築の茶の間及び釈迦堂修繕の作事小屋五ヶ所外に本行院、本妙院、本成院、常仙院、安龍寺等を彼等の休息所に宛て、祖師堂にては本日午前八時より住職以下本寺末寺の僧侶數十名席を定めて法会を行ひ、西側釈迦堂に於て説教をなし夜に入れば両堂を開放して信徒の休憩所即ち参籠堂に宛る筈なり。又石段の両側には各講中奉納の長提灯を点じ列ね、中央には善の綱を張りて諸人法縁にとるの便とすべしとなり。左れば各露店商人見世物師の如きは例年の如く地所割小屋掛けに忙がはしく、中にも枝杵を商なふ者は盛んに神奈川県より仕込み来りて二銭三銭より十五銭位までに売捌かんと意気組み、坂下の料理屋萬屋丹波屋如きも昨日来店頭を飾りて景気を添へ居れり。品川署にては予かじめ混雑を察し池上小学校を出張所として非番当番の巡查を派し山上山下を警戒し、警視庁の武藤警部橋爪一課長は特に刑事巡查十名を率いて同寺を警戒する事となれり。又新井宿の吉田病院長は特に救護員を同寺へ派して負傷者発病者等の手当をなさしむる筈なりといふ。又新橋停車場にては既記の如く本日特に十数回の臨時列車を増発するため従来の発車時刻を左の如く繰下げたり（時刻表省略）

大森停車場にては例年の如く八景園の側らに乗車口を設け入口を三ヶ所に分ちて乗客の便に供へ、電鉄会社にては今明両日新橋品川間に七十五両の馬車を発し朝五時より夜一時半まで運転せしむる由なり。又豊多摩郡和田堀の内の妙法寺にては明日会式を執行するに付、本門寺より廻るもの又特に同寺へ赴むくもの等はまた非常に群集すべきに付、新宿署にては警官を派して警戒を加へ甲武鉄道会社は特に中野駅までの客車を増発し堀の内半蔵門間の往復馬車も車輛を増して参詣者の便を図る由。信衆のノツ

ペイ汁、煎餅屋の掘出し煎餅其他各商個の前景気は例年の如くなれば記さず。

明治三十四年（一九〇一）十月十三日朝刊（東京朝日）

●昨日の会式

昨今両日を以て執行する池上本門寺会式の前景況は既に記したる如くなるが、信徒の参詣は昨朝十時五十分新橋発の臨時列車より漸く増加し始め、横浜よりする者と大森に合して其雑沓一方ならず。八景園前より新井宿の道筋の如きは商人、芸妓、待合の女将、落語家などの二人乗の綱曳にて景気好く参詣するもあり、徒歩の講中と普通の参詣人とは押しつ押しされつ池上を指して押行きしが昼間の天気は曇天ながら正午前後に少雨ありしのみなりしかば諸商人の喜び一方ならず、いづれも盛んに店を並べいたるが最も多かりしは柿と栗次は大黒鮭其他には麦藁の大森細工、山本の漬物類、粕漬、立花おこし、餛飩、しる粉、にこみおでん等なりき。然るほどに本門寺門前は一入の大混雑を極はめ、萬屋丹波屋等の各割烹店は非常の繁昌なりしより。新任の村田品川署長は池上小学校の出張所において道路を巡視し斎藤警部は山上山下の巡查を指揮し十分に警戒する所ありしが山上祖師堂前の念珠、守札等は売れ行き様子なりき。斯くて各講中の休息所は前にも記せし如く其々作事小屋に設け客殿焼跡には日本橋開仁講、新橋村雲講、二神講、子安講、十二日講、小結社講等あり。祖師堂裏手の作事小屋には四谷麴町旭蝨燭講あり。方丈茶の間には紫幕を張りここにも各講中ひかへ。焼残りし台所にては講中の炊出しに忙しく祖師堂東側には観物場あり其群集筆紙に尽し難きほどなりしが夕刻よりは更に無数の参詣者あるべき模様なりき。

明治三十四年十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上の会式余聞

池上本門寺会式の景況は昼夜とも前号に記せしが尚其餘聞を拾へば。

△大森停車場の混雑

一昨夜は十二時頃より氣遣ひたる空の雨となりしがば数万の參詣人は我一と大森停車場へ押寄せ来りしかば、同場は見る見る人の山を築き十二時二十七分の終列車に乗遅れじと乗合ひへし合ひ犇めくさま何に譬へん様もなかりしかば同場にては怪我あらせじとプラットホームへ入る柵を開きし為め、幸ひ大怪我を為せしものは無かりしも微傷を負ひしたる者数名を出せしが乗車の際指を折り腕を挫きたるもの五六名あり此杞憂の為め発車時間遅れ翌午前一時過ぎ漸く発車したほどなりしと。

△警察の事故

同日品川警察署本門寺出張所にて取扱ひたる事故は酩酊者保護百四十人、喧嘩口論七十二件、携帯品の注意を受けし者三百六十人、挙動不審のスリ四人、現行犯スリ十二人、迷子八名、老幼者保護百三十三件、取得物八個なりしと。

△乗車券の発売数

新橋大森間の停車場にて発売せし切符の数は新橋一万六千八百十六枚、大森二万三千余枚、品川七千四百六十六枚、品川へ下車の分八千四百四十八枚なりしと。

△乗降者数

当日大森停車場にて取扱ひたる乗降客数は六万余なりしといふ。

△電鉄の上り高

電鉄馬車会社の上り金高を聞くに本社四千百六十四円九十六銭五厘、品川六百二十九円七十三銭なりし。因に記す同馬車は一昨夜は一時まで運転し昨日は午前三時より運転を始めたる由。

●堀ノ内の会式

堀ノ内の祖師妙法寺の会式は昨日執行したるが、朝来の強雨にて参詣人は熱心なる講中のみにて、池上より廻る連中も雨に恐れて途中より引返したれば、眞の信心者が蓑笠の草鞋穿き又は人力車にてちらほらと出掛けるのみなりしかば前夜来徹夜して準備したる各茶屋の失望云ふ許りなく殊に信樂、梅本等にては凡そ三百円許り損耗に歸したる由。此模様にては夜に入るもさしたる事は無かるべしといふ。

●東京歳時記 池上の会式(上) 銀台子

凡僧野師の多いのを嘆いて法華の正宗を起し、末法万年の闇を照らした日蓮上人の会式は、毎年十月十二三の両日に池上の本門寺や堀内の妙法寺で執行される。僕等兩人は午後五時二十五分に乗ることに決めて、新橋停車場の楼上から降りてくると、はや大森行の老幼男女は改札口へ四列に繋がつて、出札所の上の時計を振返つては、改札係の出で来るの遅いのを憤れている。そこへ横浜発の列車が着く。降りたともども宛然うんかの其のやうで、十中六七は手に手に大森土産の枝柿、麦藁細工、立花おこし、住吉踊の人形、南無妙法蓮華經の小旗を持つている。それが悉皆出了つてから我々の改札口が開かれた、一分時をも迂しがつて待かまへていた男女は、警官の制止も肯かばこそ紛と改札口へ雪崩れ込む。押す突く倒す駆だす。いやもう戦場へでも馳むかひさうな勢!。僕は英忠君にはぐれまいと、血眼になつて負けずに駆だすのであつた。

やがて飛びこんだ車室は、たしかブレーキバンの隣だつたと思ふ。「八重なんぞ到底来られませんよ何しろ貴郎鉄道馬車でも那とほりでしたもの」と僕の前へ腰かけた二十五六の内儀は、二歳ばかりの背

の嬰兒を揺りながら、夫らしい男に囁いた。僕は英忠君と他のに比べて我々の車室がまづまづ隙いている方だと喜んで来た。ところへ喘ぎ喘ぎ奔つて来た兩人の男が有る。兩人とも信者とみえて数珠を頸へ懸けているが、突然僕等の車室の闊を排して眺こみさうにした。

「入れねえ入れねえ、入れねえつたら入れねえてえのに」と闊の傍にいた親方らしいのは叫んだ。「入れなくつても入るのだ」と車外の兩人は留めるのも背かないで飛込んだ。

「畜生！破きやがつたな俺の衣服を、出る出る——さあ承知がならねえ。出る外まで出る」と親方は鍵裂になつた衣服の裾を示ながら喚いた。「何だと！」と兩人の中の若い方は血相変へて腕を捲つたが、破れた裾を示せられて連然に恐縮して、「これは失礼しました。つい乗遅れてはと慌てたもんですから」とびよこびよこ頭を低げて謝つた。謝られれば親方も江戸児だ。

「えい慌てたと言ひなさりやあ、俺も強請がましいことは言はねえ。我慢しますよ。だが泡を喰ふにも程がある。あらはと俺が入れねえからつと留めたのに。何ほ夜だつてこんな破けた衣服を着ていちゃあ、講中の人に決が悪うがさあ。明日着て帰ることも能きませんや」と呟いている。

左右するうちに車長が笛を吹く。列車は徐に進行を始めたのである。同時に車室の中は甲説き乙ささやき却々やかましい。

「この次のごみますよ」

「さやうでございますよ」

「たいくつだなあ」

「たいくつだつて二十分の帳場だよ二十分の」

金杉を過ぎ高輪を過ぎると品川の海は、今を上汐のどぶりとどぶり石崖の岸を洗つている。

品川では一人も降りる人が無い。一分間経つと直に大森へ向ふのであつた。其停車場へ近くと列車の車室車室から、わあつといふ歓喜の声が聞える。

明治三十四年（一九〇二）十月十五日朝刊（東京朝日）

●東京歳時記 池上の会式（中） 銀台子

やがて大森の停車場を左へ降りて、茶店や麦藁細工の店の前を通ぬけると、踏切の向に高い台を拵へて、そのうへで大篝火を焚いている。

「ありやありやありややがる」と笑ふ。

「賛成々と仰有います」と拍手する。

「熱い熱いとばかりに」と駆だす。

参詣の男女は黒闇々の中には是恩光を認めて、おぼえずも雀踊して喜び且つ勇むのであつた。篝火台の下には両人の男がいて、参詣者の群の来るのを見はからつては、柄杓で石油を注ぎかけている。そのたびに火は発と盛んに燃あがつて、一二丈づつの光炎が四下を照らすのである。

大篝火を背後にいよいよ池上道へ向ふと、今まで明るかつたのに引かへて、おそろしい暗い路を辿らねばならぬ。をりをりは鱈鮓屋や、おこし屋や壺焼屋などもあるが、月は無し雨を含んだ曇天の不景気なこと夥多しい。

明神橋近くから徐々あかるくなる。団扇太鼓の音が烈しくなつて題目の聲が高くなる。両傍には鮓、柿、栗、おこし、パン、煎餅、漬物、自然薯、麦藁細工、つばやき、鰻頭、切餅などの店が出ている。僕等の本門寺へ向つたのは、尚時刻が早かつたため、万灯を持つてゆく講中は極めて少く、随つて大層な雑

沓もしなかつたが、砂埃のぼこぼこ路は下駄の齒も埋まるほどで、これが白昼であつたら天に漲る黄塵が見えるだらうと想はれた。

露店の軒を並べたところから僅に進むと、里芋や葱畑の左右にある路へ出る。ここまで来ると気味の悪いほど乞食がいる。一族五六人のが一人二人つつ彼処此処へ陣どつて、カンテラや蠟燭を前へ置いて哀れな声を搾つている。「このとほりの不具者でござります」「後生まいりの旦那様や御新造さま」「あだやおろそかには頂きません」「お旦那様や御新造さま」

前を通る参詣者の少い時には、煙草を喫している女乞食もあつた。それから大門前まで来ると、丹波屋、玉泉館などの軒端に、横浜の講中の万灯が夥多しく立ててあつて、楼上には太鼓の音が絶えず響き、本門寺への敷石の路は俄然に賑ふ。おでんを喰ひながら行く子守の背後から、左右に高張提灯の灯つた石段へ進むと、石段の中央に太い綱が張わたしてあつた、巡査が左側通行を励行している。推しつ推さら面白く眺めているのであつた。

然し後から後から来る万灯を覩て、我々は少しく感じたことがある。それは他でもない、万灯の形に種々の変つた形のあることだ。講中の人々が我一派の万灯の形に、珍奇な趣向を凝らして誇つているのが、歴然と見え透いていることだ。

この万灯の形の上の競争は、やがて祭礼の山車に華美を競ふのと、其精神に於いて毫も異ならぬことが認められるのだ。もとより多くの講中の人々の中には、心から法華宗に帰依している者も少くなからうが、万灯の華美を競ふ講中の多いのを見て我々はいきほい是人々の信仰の浅深を疑はずにはいらなかつた。殊に或講中の如きは二十余名の少女を先にたたして、団扇太鼓や拍子木の音いさましくやつて来た。その少女が悉く袒いで紅い襦袢を示せているのに至つては、我々は実に驚き呆れざるを得なかつ

た。こんなことを言つたら講中の人の中には、或は怒る人も有るかは知らないが、我々は怒る人を以て信仰心の薄い人と認めねばならぬ。如何となれば我不愛身命但無上の道を惜んだ宗祖は、斯る愚々しい信者を望まざる理がない。然るに講中なるものの多くの是挙動は、いかにも愚でなく考へらるる、我々をして酷評せしむれば池上の会式は、東京中の有志者（無論法華信者ではない）の祭礼かと想はれる。十中七八乃至八九は決して信者ではない。面白半分に火事場へ駆つける野次馬と同じ性質の者だ。

明治三十四年（一九〇一）十月二十日朝刊（東京朝日）

●東京歳時記 池上の会式（下の下） 銀台子

我々は堂を降りて猶更其感を強くした。何となれば厳格な講中には決してそんなことは無からうが、某講中の若者の中には太鼓、銅鑼、拍子木の外に、石油の空缶を打っているのを見かけた。もつとひどいのは石油の空缶へ石を入れて、ガランガランと鳴らして行くのもあつた。更にひどいのは「コラサツサイソサツサ」と囃して行くのもあつた。「テヤテヤテヤイササカリンカリン」とイソ節を唄つて歩く者もあれば、「父は兵庫に赴かん」と唸つて駆けて行くのもあつた。これが果して日蓮宗の信者である乎。もし然らば宗祖も地下に落涙されるであらう。我々は法華の信者ではないが、其宗旨の為に惜み且嘆くの情に堪ないのである。

ややあつて両人は釈迦殿へ往てみたのである。そこには説教がある。満堂の男女は案外静肅に静聴していたが、寺男と覺しい両人の老人が堂縁へ坐て、賽銭か何かれつ長栄稻荷の繁昌を見ながら、山門を過ぎて十六間に二十二間の本堂へ登ると、堂前に数百挺のヘウソクが花瓦斯かとばかりに輝いて、賽銭は雨が降るやうに投込まれている。

「妙法蓮華經、妙法蓮華經」と高かに数珠を揉む。

堂奥にも昼を欺くばかりに百目が点つている。僕等は堂縁の群集を分けて堂奥へと進んだ。

まだ万灯の数は一向すくない。

堂内へ進むとお守を売っている。却々いそがしさうだ。更に進むと金色燦爛たる祖師堂前の大天蓋の下に、数百の老幼が所謂参籠をしているのを認めた。

明治三十四年（一九〇一）十月十五日朝刊（読売）

○賽銭三円六十銭

池上本門寺の星の墓の前に据えてあつた賽銭箱を開けて見ると去る十二、十三の二日で三円六十銭はいつて居つたそうだ。

明治三十四年十月十七日朝刊（東京朝日）

●東京歳時記 池上の会式（下の上） 銀台子

参籠をしているのは大概老男老女で、妙齢の女子は数百名の中に。ほんの一人二人しかいない。その一人二人も東京の者ではないらしかつた。我々は久しく堂奥を徘徊して、参籠の場の光景を眺めていたが、数百名の中には坐睡つている者もある。横に臥そべつている者もある。題目を唱へている者もある。宛然寄席の中人のやうで、わやわやと喧噪を極めていた。

やがて紫幕を張り紅白の餅を始め、さまざまの菓子を供へてある祖師堂の前へ行くと、一人の老人が

若い僧の指揮を受けながら、御洗米の喜捨につく男女の姓名を、いそがしさうに書いてある。このとき突然に堂前が騒がしくなつたので、英忠君は急いで其方へ往つた。僕も其あとからついて往つてみると、もう夜が大分更けて来たので、いはゆる八百八講の講中が、五人十人二十人づつ堂前へ来て万灯を捧げ、一心不乱に題目を唱へながら、拍子木を入れて団扇太鼓を打つのであつた。甲の講中が去ると乙の講中が来る。乙が去ると丙が来る。僕等は面白半分と言つては敬意をかくかも知れないが、この万灯が来て大騒ぎに騒ぐのの喧しいを、耳を押へながの勘定に就いて争つていたので、浅ましくなつて堂を降りて了つた。

それから推しつ推されつ各講中の詰めている作事場の前を通つて、本堂裏の炊出し場へ往つてみたら、盥大のお鉢に炊たての飯が、何杯となく盛られてあつた。蓮や人参などの煮染類も、小山のやうに煮られてあつた。むかしは参籠の善男善女一同へ、小豆粥を炊いて与へたものださうだが、近年は各講中へ普通の白米を炊いて出すので、二斗五升づつ炊ける大釜二個と煮染用の大鍋が三個据えられてあつた。我々が往つて訊いたときにさへ、もう二十三俵炊いたと話していたから、少なくとも夜中に十石位は炊いたらう。以て講中の人数の如何に多いかが推知せられる。

炊き出し場を出て無銭旅行者の演説や蓄音機を聞かせる店や兄弟組の競売などのいる前から、本堂の東手へ往つてみると、猪だと称している豚や、改良劍舞、仁和賀、日蓮一代記などの観覧が出てここにも黒山のやうに人が佇立んでいる。平日は閑寂な淨地であるけれど、今日は満山人を以て埋められている。

ふたたび本堂前へ廻つて来ると、今が出さかりの万灯は相次いで石段を昇つてくる。

「ドンドコドコドンドン——チョンチョンチョンチョン——ガランガランガングラン——妙法蓮

華經妙法蓮華經」

いやもう喧しきは一通でない。

然し山を降りると来る人三分で、帰る人七分であつたから、我々も帰途に就くことにした。

明治三十五年（一九〇二）八月十六日朝刊（東京朝日）

●妙法寺の千部会修行

府下豊多摩郡和田堀の内村なる日蓮宗妙法寺にては来る十八日より二十七日まで千部会修行の式あり。各講中は奉納物を整のへ例の万灯団扇太鼓賑やかに参詣する筈なれば、同所の茶屋信楽梅本其他の家々にては当日の準備に忙がはしく。新宿署にては沿道を徘徊する乞食を管外へ追ひ払ひ又掏摸喧嘩等を警戒し参詣者の安全を図る由なり。

明治三十五年（一九〇二）九月十三日朝刊（読売）

○臨時列車運転

本日は片瀬龍口寺難会執行に付、午前五時十五分国府津駅発横浜行臨時旅客列車を運転する由。

明治三十五年十月九日朝刊（読売）

●御会式

例年の如く来十二、十三の両日は池上本門寺堀内妙法寺等の会式なれば、参詣人の便にとて新橋鉄道

作業局甲武鉄道会社等にては当日臨時列車を發し其筋にても雑沓を慮り警戒するは記すまでもなきが、日蓮宗の信者は昨日より仏壇なる祖師像の頭に御綿とて紅染の綿を着せ造花に紅黃等に染めたる色餅精進物の膳部を供ふる事なれば市中の菓子屋団子屋等に色餅を見るに至るべく花車屋には造花御綿を見るべし。却説信者は十二日に池上に御籠りをなしそれより堀内に廻りて歸途に就く順序なるが、其筋にては池上の御籠を午後十二時限となす由にて目下池上堀内とも附近の飲食店は更なり名物煎餅枝柿等を売る家も來客を迎ふる準備に日も維足らぬ光景なりと。

明治三十五年十月九日朝刊（東京朝日）

●池上会式と臨時列車

來十二三兩日池上本門寺会式に付き、作業局にては新橋川崎間及び新橋横濱間に於て数回の臨時列車を發着せしむ。其内新橋發川崎又は横濱行の分左の如し。

十二日。午前九時五十分、同十一時五分、同十二時四十分。午後零時四十五分、同二時、同二時四十分、同三時四十分、同四時十五分、同五時四十五分、同六時四十分、同七時二十分、同八時、同八時四十五分、同九時、同十一時。

十三日。午前零時十分、同五時三十五分、同六時、同六時三十五分、同七時、同八時七分、同九時。

●官線時間線下

別項臨時列車増發の爲め、來十二、十三兩日に於て新橋發着普通列車中十分乃至十五分間の線下をなすものあり。

明治三十五年（一九〇二）十月十一日朝刊（東京朝日）

●本門寺の御会式

荏原郡池上村なる本門寺の会式は来十二三両日なれば今右に就ての目立ちたる事柄を掲げて参詣者の便に供せん。

▲品川警察署の取締

品川署に於ては署長が署員一同をあつめ取締方に就て精密に協議を遂げたる上本門寺執事をも出署せしめ共に取締法に關して相談を為したり。

▲署長の訓告

―当日途上の警戒を為すに當り、参詣者保護の任に當る巡查が事故の輕重に關せず何事をも処理して人名住所其他を手控にせんとするは徒に時間を要するのみならず野次馬連の足をとめて雑沓を重ぬるおそれあれば、右の如き無用の事は廢し些少の事は一言注意を与え足をとめて通行をすみやかにならしむる様、受持巡查に対して品川署長は訓告したりと這は尤も氣の利きたる警戒法と謂ふべし。

▲警官臨時出張所

当日は大森停車場に接する入新井宿巡查駐在所を以て品川署員の出張所にあて警視庁第三部第一医員の出張所をも同所になし、其外本門寺門前池上小学校内及び寺内長栄稲荷の祠等をあて医師検疫員は何れへもつめ居る筈なりとぞ。

▲人力車の取締

例年人力車は大森停車場より本門寺前丹波屋まで車止めの札を出して通行を禁じたるも、本年は露店込入りたる場所も成るべく警官が取締て車体の通行を得せしむる様に計る由なれば、右に就いて昨日は

品川人力車夫組合正副取締を召喚したる筈なり。

▲乞食の取締

乞食はいつも此処彼処にあつまり居て通行人を妨ぐる事夥しければ、其筋にても其取締には困難を感じ居る次第なるが、本年は西新井宿のみくに橋より一二丁の間なる田圃道へ集め参詣者の袖にすがりてうるさく乞い廻る事を禁じたり。

▲お籠りと風俗壊乱

祖師堂又はおこもり堂にはいつも十二時過になれば点火を消すの風あるを以て、頗る風俗壊乱の声を耳にすることあり。依つて今度は斯る悪弊の起らぬ様各講中より講名を附したる提灯を掲げおき、提灯のなき場所に群集し居る者は俗にいふ野次馬連と見なして警官は退場を命ずるといふ。

▲万灯の担込み

各講中より例年担ぎ込む樽御輿や万灯は、警視庁令の十五歳以上の者が云々との事柄を用ひ一時は差止めんと議も出でしかど、本門寺の栄枯盛衰にも係はる事なればとて請願の向もありし為め、特別を以て最も静粛に持込むやう警告したりと聞く。

▲品川貸座敷

品川の貸座敷は此会式の功德をうけて毎年客足のつく時なれば、各楼とも手具脛ひいて待受くる事ならん。昨年 of 景況を記して粹士の参考に供せん。昨年十月十日十一日の夜は遊客数四五百人、十二日は千三百人散財者千五百円、翌十三日は遊客五百人に減じたりと。

▲臨時汽車

鉄道作業局は此御会式に関し臨時汽車を發し往復切符を発売する由なるが、猶十二日午後十一時二十

分新橋発横浜行急行列車も鶴見川崎両駅に各一分間づゝ停車せしめ乗客の便を計るといふ。次に序なれば汽車の発車時間を左に掲げん。(以下省略)

明治三十五年(一九〇二)十月十一日朝刊(読売)

●お会式の警戒

明日は池上本門寺のお会式当日なれば信者各講中より例の団扇太鼓景気好く本山に押寄する事なれば所轄警察署にては新橋品川大森の各停車場は素より本山附近に非常巡查を派して警戒するは云ふまでもなく、彼のお籠堂の如きは多数の老若男女暗黒の中に一夜を明す事なれば、各講に注意して終夜各印の提灯を点火さしめて嚴重なる取締を為す由に聞けり。

明治三十五年十月十二日朝刊(読売)

●御会式のペスト検査

今明両日池上本門寺の会式には信者其他の横浜より来る者多かるべく時節柄警視庁にては当日大森駅に特に五名の検査官と二名の警察医を派し乗客の検査に従事せしむる由。

明治三十五年十月十二日朝刊(東京朝日)

●本門寺お会式続聞

既記の如く本日は池上本門寺会式に付き新橋停車場にては特に往復切符の発売所を設け芝署よりは非

常角袖巡查を派出し警視庁よりも掏摸係を出し新橋、品川、大森の三停車場の掏摸難を警戒し尚列車内へも乗込て盜難の予防を為す筈なるが大森停車場の如きは雑沓を防ぐ為め八景園下へ特別の切符売場ニケ所設け、夜に入つては篝火をニケ所にも設くる由なり。又諸商人等は天氣都合よきを見込み大森に集まりて店張の地割に余念なく池上大門外の飲食店丹波屋外數軒も講中の割付けにて景氣中々盛んなるが山上の各觀世物も又夫れそれと地割に奔走し居れり。又石段は右左に往復をわくる様綱を張り、祖師堂釈迦堂の近傍には各講中の高張提灯數百本を立て一目瞭然たらしめたり。因みに記す同所の名物柿は本年不出來にて枝柿は五錢以上二十五錢位の相場なりと。

明治三十五年（一九〇二）十月十三日朝刊（読売）

●昨日の本門寺

昨日は池上本門寺のお会式当日なりしが朝來よりの好天氣に各講信徒を始め露店商人の悦び大方ならず老若男女打交りて団扇太鼓勇ましく万灯真先に本山指して繰出す事引も切らず鉄道馬車は二十余台を増発したれど各車とも満員にて新橋停車場は午前十時頃に至りては場内人を以て満され品川停車場も又同様の有様なれば予定の如く芝署にては警官十數名を兩停車場に派して万一を警戒し品川署にては署長非番巡查繰出にて早朝より大森停車場及び本門寺山上山下を堅めたり、池上山上は各講社の詰所各種の飲食店、小間物植木、觀物小屋等を以て満され山下は栗、柿、餅、麦藁細工等軒を列べ大森停車場は例年の如く八景園前の線路際に札売場を設け夕方よりは篝火を焚きたるが列車の発着には混雑一方ならず夜に入ては愈よ混雑を極めたり。

明治三十五年十月十四日朝刊（読売）

●本門寺御会式の出来事

一昨日の景況は昨紙に報ぜる如くなるが夜に入りては一層の混雑を来したるが今重なる出来事を挙ぐれば▲醉漢教員 南葛飾郡葛西村大字十八町十八番地田中芳次（三十四）と呼ぶ同村小学校教員は泥酔して本門寺山下を徘徊せるを危険なりと見て池上小学校なる警官休憩所に連れ行き保護したるに何時か睡眠して卓上の置洋灯を転倒し已に小火を出さんとし漸く揉消たるに今度は吐瀉を始めたれば余りの手数に係官も持て余せしとは左もあらん▲老婆の卒死 麻布区本村町十八番地海軍大尉田中菊太郎の実母ナホ（四十七）は午後六時頃大森停車場にて脳充血を起して卒倒せしが治療の甲斐なく絶命したり▲次は胃痙攣 午後三時頃浅草区元吉町三番地鈴木房次郎（五十七）が鮫を鱈腹詰込み胃痙攣を発したりしを手当を加へて説諭放還し▲次には脚気衝心 浅草区松葉町四十七番地石村勘十（四十三）は品川署の人足に雇はれたる者なるが午後二時頃大森停車場にて脚気衝心を起したれば手当の上同村役場にて保護を与へたり此他本門寺石坂の中程より転落して微傷を負ひし女あり品川大森の混雑も非常にて新橋より大森までの乗客数は総数二万六千五百九十一人と聞え大森へ下車せしもの新橋横浜の乗客を合せて大凡三万六千余人に及びたりと

明治三十六年（一九〇三）九月十日朝刊（東京朝日）

●御難会と客車増結

鉄道作業局にては来る十二、十三両日、藤沢駅附近片瀬龍口寺に於て御難会執行により参詣者多数の

見込に付、当日国府津新橋間列車に客車の増結を為す由。

明治三十六年十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上会式の余聞

池上本門寺の会式一昨夜の景況は前号に記せしが法華第一の道場祖師涅槃の靈地とて年々変らぬ賑ひに法の雨を冒して繰込みし連中得からざりしも流石に道路の泥濘を恐れて見合せし人も多く中流以上の参詣割合に淋しく新橋停車場の調べによるも大森迄の一二等客僅に二百十二人往復百五十八人のみにて三等客は片道と往復とを併せて七千三百三人ありしといふ。而して帰途大森より乗込みし乗客は二万人に及びたるも大概は三等客なりしと、序に電車鉄道品川新橋間の当日収入を聞くに七百二十三円七十五錢にて終夜運転せしも尚昨年よりは少数なりしと去れば品川署にて扱ひたる雑件も酩酊者五十四件喧嘩百五件等にて負傷者は僅か二名に過ぎざりしと。

●堀の内会式の模様

維新前は勿論其後とても汽車腕車の便なかりし頃は堀の内の妙法寺と云へば草鞋がけの参詣に余程の骨折信心堅固の輩是にも屈せず押出すより会式の如きは沿道の掛茶屋まで皆大繁盛なりしが、汽車の達するに及びて妙法寺附近の外は景気俄に衰へ参詣者も頭数は殖ゑながら汽車にて帰りを急ぐゆゑか土地の茶屋小屋に足を止めるもの少き始末に景気といふもの殆んどなく、法華正法もノツペイ商法も俱に不印の極に達せし所此一兩年は追々講中の人氣も恢復し門前の料理店梅本信衆奥大黒等は此機を外さず講中へ運動せしかば漸く以前の景気に返らんとする様子なり。去れば昨日の会式にも非常の人数あらんとて夫れそれ用意をなせし所前日来の雨は尚止まず参詣の人数も午前の内は一向捗々しからぬ模様にて僅

かに池上より廻りお籠りの連中の為め新宿大久保等の停車場が少しく雑沓したるに過ぎざりしと、さて妙法寺の境内には例によりて講中其他の奉納物を飾りし作庭数箇所あり観物も一二軒にて売物は相変らず堀内せんべい漬物枝柿等なりしも柿は十個十五銭の高値に手を出す人も多いからざりき。斯る中にも麴町の消防一番組は奉納額を牛車に載せ馬鹿囃子にて繰込み、続いて月參講御花講も大万灯を押立て、威勢よく練込みたれば稍や賑ひを現はしたり。又飲食店は不景氣と競争の結果にて品物の吟味よりも先づ安直を專一に料理三品二十五銭などの大勉強もあり、名物のノッペイ汁は一椀二銭以上にて何時もながら是ばかりは大当りと見えたり而して同寺は午後十二時限りに門を閉ぢ附近の消防夫は嚴重警戒する筈なりと。

明治三十七年（一九〇四）十月九日朝刊（読売）

●会式と臨時列車

鉄道作業局にては来る十二、三両日間池上本門寺の縁日に相当するを以て參詣者の便を計り新橋川崎横浜間に多数の臨時列車を運転せしむる由。

明治三十七年十月十一日朝刊（読売）

●本門寺の会式（前況）

例年の通り十二、十三の両日八池上の本門寺にて会式を催すに付き、東京附近及び稲毛方面神奈川、埼玉、千葉等の各末寺より一名宛の僧侶を上し、又日蓮宗八百八講の信徒も目下夫々準備中なるが当日

品川警察署にてハ署員総出にて入新井村駐在所を始め大森停車場際及び本門寺門前の小学校を出張所に充て、警視庁第三部の医員出張所を山上長栄稲荷祠内に設けて非常を警戒し、尚ほ大森停車場際線路にハ五個の電灯を点じ特に群衆の雑沓を防ぐ為め札売場を線路際に設け京浜電車は徹夜にて七十六人乗の電車十台を運転する由。本年の地代ハ一坪十五錢以上三十錢、二間間口の家ハ二日間五円以上二十五円以下にて一昨夜まで品川署に届出でし出店商人の数ハ千五百人余の多きに達し其中興行物ハ三十六他ハ柿、栗、餅、飲食店等多く戦時の事として人出ハ如何あらんと商人等ハ切に氣遣ひ居れりと云ふ。

明治三十七年（一九〇四）十月十一日朝刊（東京朝日）

【広告】

池上会式割引

本月十二、十三の両日池上本門寺会式に付新橋駅に於て左の割引往復乗車券発売致候

新橋より大森行（往復） 金十二錢

蒲田行 金二十錢

明治三十七年十月

鉄道作業局運輸部

【広告】

十月十二日

池上会式当日

電気鉄道

品川大森 往復切符発売
徹夜運転
京浜電気鉄道会社

明治三十七年十月十二日朝刊（東京朝日）

【広告】

池上会式割引

本月十二、十三の両日池上本門寺会式に付新橋駅に於て左の割引往復乗車券発売致候

新橋より大森行（往復） 金十六銭

蒲田行 金二十銭

明治三十七年十月

鉄道作業局運輸部

昨日本広告中大森行十二銭とあるは十六銭の誤植

【広告】

十月十二日

池上会式当日

電気鉄道

品川大森 往復切符発売

品川大森 間往復金八銭

徹夜運転

京浜電気鉄道会社

明治三十七年（一九〇四）十月十二日朝刊（読売）

●街鉄と池上本門寺会式

東京市街鉄道会社にては過日の重役会議に於て本日の池上本門寺会式には徹夜運転を為す可き由議決したりと云ふ。

明治三十七年十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上会式の夜況

池上本門寺会式昼の景況は前号の如くなるが其後は午後三四時頃より参詣人益々出さかり非常の賑ひを呈したり。かくて午後六時頃より各講中は万灯を押し立てて団扇太鼓を叩き立てたる中にも横浜市の開運結社または会式講の時計万灯、三宝講、子安講、日本橋開仁元講、祈祷講、十五日講、麴町結社講等最も景気よかりき。又境内は本堂祖師堂は勿論表門の石段辺より山上に至る迄参詣人は立錫の地なく詰かけ品川署の警官は此間を警戒して掏摸二十余人を捕へたるが十時頃になりては層一層賑ひを加ふる許なりき。

明治三十八年（一九〇五）十月三日朝刊（東京朝日）

● 雑司ヶ谷の会式

府下北豊島郡雑司ヶ谷の鬼子母神堂にては来る八日より二十四日まで祖師会式を挙行する筈にて境内には例年の通り祖師一代記の人形を飾り付け三崎座女優の奉納芝居をも興行する由。

明治三十八年（一九〇五）十月八日朝刊（東京朝日）

【広告】

池上会式割引

本月十二、十三の両日池上本門寺会式に付新橋より数回の臨時列車を發し左の割引往復乗車券二日間通用を発売致し候

新橋より（大森蒲田）行

往復金拾五錢

此の乗車券は大森蒲田のいづれに下車し帰途いづれより乗車せらるゝも御随意に有之候
三十八年十月

鉄道作業局運輸部

明治三十八年十月十一日朝刊（東京朝日）

【広告】

池上会式

十二日は

東京電車鉄道

終夜運転

京浜電気鉄道

▲品川大森間割引往復十銭十二日十三日通用

明治三十八年十月十二日朝刊（東京朝日）

【広告】

池上会式

十二日は

東京電車鉄道

終夜運転

京浜電気鉄道

▲品川大森間割引往復十銭十二日十三日通用

明治三十九年（一九〇六）十月十日朝刊（東京朝日）

【広告】

池上会式詣で大割引

本月十二、十三の両日池上本門寺会式に付新橋横浜間に数回の臨時列車を運転し大割引往復乗車券(通用二日間)を発売致候

新橋より(大森蒲田)行

三等往復十五銭

横浜より(蒲田大森)行

三等往復三十銭

此の乗車券は大森、蒲田の孰れに下車し帰途孰より乗車せらるゝも御随意に有之候
鉄道作業局

明治三十九年十月十一日朝刊(東京朝日)

●池上会式の前況

宗門弘布の方便に世間の人気を煽ぎ立つる団扇太鼓の音喧ましき池上本門寺の会式も明十二日となり
たれば、信徒は例の大万灯勇ましく繰出すべし、去れば混雑を慮り大森八景園下なる池上村中原銀行前
より同村根方及び馬込村等の各所間を車馬往来止めとなし充分警戒をなし又京浜電鉄は特にボギー車十
台を出だして大森八ツ山間を終夜往復せしめ両停留場には医師一名、看護婦十名宛を派して救護所を設
け又夜に入りては八ツ山大森海岸の三ヶ所へイルミネーションを点ずといふ。

明治三十九年(一九〇六)十月十三日朝刊(読売)

●池上の御会式 昨日の景況

お会式の涙雨とて降らで叶はぬものの如く定まれるに、昨日は前日来の雨も忽然と晴れ渡り秋日和の最と長閑なる天気なりしかば品川附近の諸商人は俄かに出店を思ひ立ち雨上りの田圃路は泥濘も多き事とて炭俵菰等を用意せるより品川大森は品切となり態々東京より買集め一昨夜より池上へ運びたるもの荷馬車三十五台に及びたりと云ふ。然れば一昨夜より昨朝に掛け長栄山の山上山下は言ふまでもなく、大森八景坂下より池上に至る沿道には名物のおこしを始め、柿、栗其他飲食等の露店隙間もなく建ち続き鉄道作業局にては新橋、大森、蒲田間に限り往復十五銭にて数回臨時列車を運転し京浜電車にては八ツ山大森間往復八銭の切符を発売せる事とて早朝より参詣に繰出す者夥だしく大森附近より池上に至る迄頗る雑沓を極めたるが午後よりは一層の出人出にて例の団扇太鼓を打叩き喧しく叫きつつ押出す講中も少からねば境内は押合圧合の大混雑なりき。右に付其筋にては充分に警戒し殊にスリの被害も夥だしからんと予想し市内の各警察署にては前夜より管内のスリ共を検束したり。

▲祖師堂の会式

午前四時三十分寄番の号鐘を合図に久保田貫主紫衣に七條の袈裟を着けて朱塗長柄の扨子を手にし紫朱衣の盛装せる五十余名の衆僧と共に大庫裏より祖師堂に練だみて会式の読経ありしが午後二時再び同様の行列にて祖師堂に練り込み祖師の影像前に読経して衣更を執行し茲に会式の法要を終れり。

▲御硯水と会式桜

御硯水の硝子瓶詰は御思召の賽銭にて売行中々好しく、古色蒼然たる会式桜は老幹に若枝を生じて四五輪の花を有りしも尊ふとく見られたり。

▲星氏の墓

昨日昼は星氏の墳墓に詣つるもの頗る多く、無数の線香の煙は雲の如くに立ち上れり。

●池上会式夜の光景

▲京浜電車の混雑

前記の如く京浜電車にては八ツ山大森間往復八錢の切符を出して二分間毎に発車し尚万一に備ふる為め停車場には救護所を設け医師看護婦等をして乗降口に立たしめ用意をさをさ怠りなかりしが八時頃より参詣人は瀬の如く詰めかけ我先きにと乗車を争ふより数名の巡查必死となりて之れを制したるにぞ迷子二三名ありし外さしたる事もなかりしが一方品川停車場は極めて閑散なりき。

▲大森の光景

停車場前には京浜電車にて立てたる高さ二丈程の絹幕の万灯にイルミネーションを点じ、八景園も紅灯幔幕イルミネーション等にて景気を付け汽車電車は絶えず群衆を此に運ぶこととて雑沓一方ならず。

▲沿道

たる大井村には品川署の出張所を設け端々に巡查を配置して警戒したるが酒気を帯びたる若物等が大森鬘を冠り棒の先に松茸をさし込み他愛もなき軽口を言ひつつ行く等滑稽百出せり。

▲本堂

には善男善女鮎を漬けたる如く詰め火水になれど読経する声遠の大伽藍も破れん計りにどよめきける。加ふるに種々の万灯を押し立て破れよと鳴らす太鼓の音、境内見世物の鳴物と和して耳も聾せん計りなりき。

▲記念絵葉書

は寺務所外二三の場所にて発売し葉書一組二十銭写真(東郷大将)十銭なるが売行は好からぬ模様な

りし。

▲各講社

は境内各寺及び旧千畳敷跡の仮屋に陣取り美しき万灯を飾り立て殆ど不夜城の光景なりし。

▲音楽と稚児

十三日は午後二時より音楽法会を行ひ稚児五十名を出だすといふ又村雲尼公より寄贈ありし本堂裏手の檜の冠木門九十間の筋堀等は既に略出来せり。

●堀の内の前景況

本日は豊多摩郡和田堀の内なる祖師のお会式として池上より参詣に廻る信者も例に依りて夥だしきより地内に出店する者五十余軒の多きに及び門前の茶屋も晴天を見込みて昨朝来夫々準備せるが当日は新宿署より二十余名の警官出張して厳しく警戒する筈。

明治三十九年（一九〇六）十月十三日朝刊（東京朝日）

●池上会式の景況

池上本門寺の会式は前日の雨天に及しても涙雨かと信徒講中は張合なき有様なりしも昨日は朝来意外の好天気となり小春日和の麗かさ法華正宗の功力よと諸商人も勇み立て露店を張り池上本門寺附近の通路は菰炭俵など敷きて泥濘を防ぎたるが果は菰も俵も大森附近に品切となりて態々東京より買入れたる由、斯くて昨日は未明より市内各講中は臨時汽車又は京浜電鉄にて繰出だし京浜の八ツ山停留場は人の山をなし正午頃には既に非常の雑沓を来したり、又大森停車場より本門寺に至る間は泥濘の為め婦女子等は大に困難し人力車は片道二十五銭乃至三十銭にて夫も正午には車馬止となり皆泥濘を冒して参詣し

境内には前記の如く炭俵など敷きあれば参詣者は喜び居たり。

▲会式の修行

本門寺本堂にては午前四時半頃第一鐘を打鳴らし地内末寺僧侶凡そ三百五十名参集して五時の合図の鐘と共に本堂に昇り住職久保田日龜師、七條の袈裟に紫衣の襟を正し八十余名の僧侶を随へて登壇し読経あり七時頃退席、午後二時再び昇堂して祖師の衣替へを行ひ式全く終了せり。

▲境内の賑ひ

斯る間に参詣者続々来集し東京の講中は庫裏脇の広場に詰所を設け神田八講、東京八講等の大連始め各講中の万灯を立列ね、地方にては名古屋の千人講の如き特に両三日前出京して本堂裏の庫裏に於て通夜をするとの意気込み其外思ひ思ひの万灯押立て正午頃より繰込み来りて団扇太鼓の音山上山下に充ちたり、又山上左方には各種の観物数十軒あり、露店は山上のみにて三百五十軒の願出あり名物の柿と栗は夥しく出店あり坂下より浄国橋際へかけ両側とも柿栗の外飲食店所狭き迄立並び是亦四百軒に及べり夜中の賑ひ推して知るべし。

▲雑況と音楽法会

以上の賑ひとて近年稀なる好況と見受けられしが其筋にては充分の取締をなし顔の売れたる掏摸は前夜来検討を加へ各停車場、本門寺境内等は多数の角拙巡查を派して警戒せり、又流行に伴ひ種々の絵葉書を発売し居れり、次に今十三日は午後二時より音楽法会を行ひ稚児五十名を出だすといふ、又村雲尼公より寄贈ありし本堂裏手の檜の冠木門九十間の筋堀等は既に略出来せり。

●堀の内の会式（附鬼子母神）

堀の内妙法寺にても昨今両日会式を行ふにつき昨日は早朝より参詣者あり甲武鉄道の電車はお茶の水

中野間大繁盛にて是また正午頃より非常に混雑し中野附近は人力車の種切れとなりて大久保、新宿等より車夫の出稼ぎするもの多かりき妙法寺境内には柿栗等名物の売店夥しく門前の信楽始め各飲食店も景気を添へて呼立てしが是は客足少き模様なりき、栗の相場は大一升二十銭より三十銭、中十七八銭、小十二銭以上、柿は一枝約十個附三銭五厘より五六銭なり。

さて十三日は会式当日なれば祖師堂にては千部経を執行する筈なるが近來は午後六時に表門を鎖つる為め昨夜繰込みたる講中は皆万灯を門外に立て、通夜をなしたり右に付新宿署にては門前に出張所を設けて徹夜警戒の筈なりしが戦後の会式と云ひ好天気とて此処も人出は多かるべし。尤も諸商人は案外不印なりとてかこち居たるを聞きしが本日は池上よりの参詣者も廻り来れば諸商人も多少繁昌すべし因に雑司ヶ谷の鬼子母神も堀の内へかけての参詣者ありて昨日も賑はひ居たり。

●夜の会式

長栄山に藁高く法灯今に明かなる池上本門寺の会式といふので昨夜其講中の尻馬に乗つて池上へ繰出した、午後六時四十五分の汽車で七時過に大森へ着くと人波を打つて渡橋を越え八景園前へ特に設けた出口から押出されて宵闇の暗さと混雑に足許も何も分らず只真直に押合て行くのである、大森停車場の前には大万灯のイルミネーションが闇に輝いて居る、往來は既に泥濘も固まつて居たが却て滑り易いのを踏み締め踏み締め行く中に、跡からも前から大万灯を押立てて団扇太鼓を叩き散らして続々遣つて来る、凝つた奴は万灯の先に立つた男が加藤清正といふ見得で紙製の鎧、陣羽織に片鎌の槍頭には三尺の立烏帽子に灯がついたのを冠つて居る。或は友禅の肌抜きに揃ひの浴衣など祭礼染みた連中も来る、是等が盛に往來する中を押分て入新井村を過ぎ田圃道を経て池上の口に掛ると左右には枝柿の店が隙間もなく立列んで景気よく客を呼び中には売人が酒の勢ひ樽柿のやうになつて暖気交りに吐鳴つて居たが総

て売行は思はしからぬ様子であつた。

浄国橋を過ぎていよいよ本門寺前へ右折すると見渡す限り左右は各講中の万灯及び飲食店の提灯屋を欺く許りに立列び帝釈結社、立行結社、下谷講其外何々講中と記した高張は両側の家々に掲げられ遠く正面の石段を望めば無数の提灯が折重なつて昇つて行くのも実に美観だ、第一の山門を潜つて石段にかゝると左右には信徒寄付の高張が頂上まで樹てられ山上にも商人、俳優、芸妓の万灯やら高張やら隙間なく輝やき講中の万灯は群集の中を遠慮なく往来して太鼓の音は耳も聾するばかり夫が十や二十ではないから少々応へた、本堂附近は実に人も埋まる雑沓、其左側は観世物小屋で如何はしい女手踊や古風の轆轤首、少しく奥の方に男女の撃剣、飛入道場破りは勝手次第と叫んで居る、本堂裏の庫裏に続いて旧焼跡には各講中結社の休憩所数十軒が仮小屋を建て一々祖師の絵像を正面に据ゑ先達が拝んで居る、引返して釈迦堂に詣つれば堂上はお籠の男女で真に立錫の余地なき混雑、其前には活動写真其他二三の観世物があつて境内到る所唯是れ大陽気の大繁昌、寔に賑かなる宗旨と今更感服も仕らぬ。

九時近くなつて雑沓は愈々益々甚だしく帰る人より来るもの多く、講中の追々盛んなのが繰込み来り団扇太鼓の外、笛、拍子木入り乃至は石油缶を叩き立て玩具の喇叭を吹立て折々万歳を以て和する輩が跡から跡から絶間なく来るので這々の体に下山し、小一里の道を再び大森停車場へ取つて返しホツと息を吐いたが九時半頃にはポツポツと降つて来た、今降り出しては彼れだけの群集や諸商人が可哀想など我も人も氣遣ふ内又元の如く空には星が晃めき初めた、停車場前は尚盛んに講中の万灯が通つて往々来るさの人影少しも絶間なく太鼓の音は汽車の響きを圧して喧しくも亦賑かであつた。(二記者)

●池上会式雑況

昨夜の池上は別記の如く午後九時頃最も賑しが概して昨年に比し参詣者は減少したり、飲食店は可成

繁昌の様子にて露店の天ぶら屋さへ七十円も売揚げて十時頃閉店したるもあり、柿栗は売行き悪しく、観物も夜に入りて一時大入を占めたるのみ、品川署は池上小学校に出張所を設け夜の九時迄に迷子四名、掏摸賽銭盗人等六名あり、此雑沓の際寺内山中にて浅草区松葉町四十一番地吉田久次郎（三十五）同馬道七丁目小早瀬常次郎（二十四）同区阿部川町百二十番地山崎和光（二十七）三名は賭博をなして捕はれたり、次に京浜電鉄は非常の繁昌にて午後九時迄の乗客は一万余人なりしと又新橋大森間汽車の乗客数は昨夜十二時迄に三等往復四千二十一人、片道四百三十四人、二等往復二百十三人、片道九十七人なりと。

明治三十九年（一九〇六）十月十四日朝刊（東京朝日）

●会式の夜半

夜の編集が一応片付いて後、やつと社を出たのは正に昨日の午前一時五分過、銀座へ出ると電車は終夜運転とてまだ盛んに往来して居る、何れも此も殆ど満員其ぎッしりと乗客を詰込んだま、人通の全く絶え果た銀座通を走り行く様何だか一種異様の感がする、アラビアン、ナイトの中にもありさうな、

品川行といふ奴に乗る、お客は職人風の恐ろしい威勢の宣（いい）のが八九分を占めて夫がいづれも皆一杯機嫌といひたいが実は一杯半位の御機嫌になつて居る、中にお茶屋の姉サンらしい変に油臭い投島田が四五人交つて居る、もてると夥しい、其処へ都新聞の配達が乗り合はす、明日の新聞だ、いや既に今日のだと言ひ争ひながら彼方此方から頻りに買手が出る、

東禅寺迄来ると監督が来て八ッ山では非常に込み合ふから余程手ばしこく下車の用意をせぬと下り損ねる虞があるといふ注意がある、成程着て見て驚いた、終点の停留場の両側長さ一町許りの間は押し合

ひへし合ひ東京帰りを待ち合すお客が黒山のやうに立て居る、車が着くと見ると客が下り切るのも待たず潮の如く押し寄せて我一と乗らうとする、車掌の制止などに頓着するものでない。

辛く此の難関を切り抜けて京浜電車の待合に行くと会社の建物一杯のイルミネーション、目ざましな人ども愚かしい、此処にも下りる客乗らうとする客ごつた返してゐる、幾台のボギー車は大森発車の方で間に合はぬとて空の儘で品川を出て行く、夫に乘らうとして叱られるお客がある、中に一人少し酔払つた足もと危なく変挺（へんてこ）来（らい）な手つきをしながら反身になつてトロンコ眼で電車の後影を見やり「斯く申す某は武蔵の国の住人クウマ谷の次郎直——」と来た、

やがて一同ボギー車に落ちつくと大抵は新橋以来の顔馴染だ、其うち誰かは知らず一人「南無妙」と音頭を取つた、浮かれ切つた満車の客は言ひ合せねど挙げて之に和して「ホーランガイキョ」と大声を張り上げたので又大笑ひとなつた、車が出る、北馬場南馬場八百屋横町至る所の踏切は人を以て埋まつて居る、電車が通る毎に俄に声を揃へてナムミョーッ！

其うち万灯が大分見える、八景園前の麦酒のイルミネーションが遠方から見える万灯も大分進化した、が団扇太鼓も余程進化した、拍子木がある石油のブリキ缶がある、甚だしきに至つては喇叭もある、喇叭のプクプツプクプツププーなどは奇抜なものだ、夫や此やでお題目の調子自ら進化した近頃はお題目とお題目との間にコラコラなどと掛声を入れるが随分ある。

大森に着くと停車場の通路は柵で塞いで新しい通路が田圃の中に急造されてある、如何に京浜電鉄が商売敵なればとて余りとしても鉄道作業局の意地の悪さ腹の小さが見え透いて可笑しい、見れば例年電鉄から引いた電気灯も今年は停車場内に見えぬ、断つたのやら断られたのやら。（大森の旦那）

●堀の内の会式

昨日は堀の内妙法寺の会式当日とて午前四時より開催し本堂には幔幕を内廻らし午前八時より式を挙げ善男善女は内陣近くまで充滿せり、朝来好天氣の事とて参詣人は前日に数倍し同十時前後には八王子発二番汽車にて同地方の信徒夥しく参詣せしと池上お籠り連の続々押寄せ来りし為め鍋屋横町より門前までは押合ひへし合ひ非常の混雑を來したるが車止の無かりし為め斯かる混雑の中へ人力車を轆込みし者もあり参詣者は一方ならぬ迷惑を感じたり、又本堂の下足番は田舎老爺を臨時に依頼したることとて何の役にも立たず参詣人は勝手次第に履物を持出せし為め大混乱を生じたるは済まぬことなり、露店商人等も池上崩れと合して前日に数倍し殊に池上に叩き損ねし祖師肖像の絵葉書を三枚一組金七錢の安値に蒸返したるも更に買手の無かりしは氣の毒なり、例の掘出しせんべい、五色漬物、芋頭等も人出の割合には捌口悪かりし模様なり信樂は流石に朝来客足多く正午までに約百六十組あり夜に入るまでには数百組に達すべし同家にては臨時女中として近在の娘連を雇入れし事とて滑稽百出せり、中野停車場は職員総出の上に数名の巡查出張して警戒せし為め混雑の割に何等の間違ひも起らざりしは僥倖なりし。

●池上会式の出来事

池上本門寺の会式に付き京浜電鉄八ツ山出張所は混雑の余り一昨夕六時頃改札口を破壊されたるが其他驚くべきは女学生風の売淫婦の夥しく出掛けたることにて巡查の説諭を受けて追払はれたるもの八十九名に及びたり当日品川署に取扱ひたる事故は左の如し(以下省略)

明治四十年(一九〇七)十月十二日朝刊(東京朝日)

【広告】

池上会式詣で大割引

本月十二、十三の両日池上本門寺会式に付新橋横浜間に数回の臨時列車を運転し左記大割引往復乗車券を発売す

新橋より(大森蒲田)行 三等往復 十三銭

横浜より(蒲田大森)行 三等往復 三十銭

右両乗車券は大森蒲田の孰れに下車し帰途孰れより乗車せらるゝも御勝手的事

品川より大森行 三等往復 八銭

蒲田行 同 十四銭

神奈川より蒲田行 三等往復 二十四銭

大森行 同 三十銭

右乗車券は何れも十二、十三の両日通用

明治四十年十月 帝國鐵道庁運輸部

電話新橋六八一、同 四一九三

明治四十一年(一九〇八)十月十二日朝刊(読売)

●本日△池上の会式

例年の如く市内の八百八講や荏原郡三十三ヶ村の信徒其れに横浜名古屋等の講中も押出してなかなかの景気なるべく。殊に本年は桁行十五間梁間十三間の紫宸殿式大客殿を新築して信徒を迎ふる由なれば一層の盛観ならん。見世物には猿芝居犬芝居男女劍舞玉乗りパノラマ活動写真、飲食店にはすしや、汁粉や、其他花簪を売る小間物店も出る筈。電車は品川万世橋間及び品川浅草間は終夜運転を行ひ新橋大

森、大森横浜間の停車場にては往復切手を売り、京浜電車は八ツ山大森間に直通車を連発し花電気を点ずる由又品川署にては池上小学校は出張所を設け非番巡查を召集して参詣人の警戒に備へ、警視庁よりは医師数名を特派し急病人の救護に当らしむる都合なり。

明治四十一年（一九〇八）十月十四日朝刊（読売）

●堀内の御会式

○池上から堀の内

十二日夜池上でお籠りをした連中は十三日朝から引切り無しに押し掛けるので十数台を増発した甲武線の電車は車体も壊れんばかりの盛況、堀の内の会式はもう六日も前から景気附いて居たが昨日は愈々会式で大導師堀内潮清師は二十餘名の伴僧を従へて法華經二巻をあげたが元来此処では日没と同時に門を閉じてお会式にさへお籠りを許さないのが特色だから夜は至つて静かだが昼中の雑踏は中野停車場から薬師堂まで押し合ひへし合ひの大騒ぎで水田へ足を踏み外した者も沢山ある。

○乞食の挟撃

之れでも夕方になつては人出もズツと減つたが秋の祭りと云ふ風情は頗る増して来た赤い裾を引っかけて色よく熟れた茱萸を掲げて近郷の娘などが物珍しそうに都の人を眺める所など絵にしたい程だつた只困つたことには癩病患みの乞食が道の両側で挟み撃にすることだ然し堀の内へ入ると名物ぬつぺい屋の姐さん達の「お休みなさいお休みなすつて居らっしゃい」の唄のやうな黄色い呼声とがやがやした賑しさで気が浮いて来る。

○桜のお花講

お会式中平年と異つて居るのはお花講から桜の造花を奉納した事と芝桜田本郷辺の桜田結社から供物を献げる十数名の可愛い稚児を寄附したことで六ツ七ツから十二三迄の童女これは祖師が最も好まれたものださうな境内には露店も沢山見えたが停車場から凡そ十五六町の田圃は根廻りの名産柿屋栗屋で一杯であった。

●池上お会式の後始末

十二日夜の池上お会式は例に依りて雑踏を極めたるが当夜の出来事を記せば

○棍棒で殴らる

十三日午前零時三十分本郷区本郷四の二魚商金子銀太郎(三四)は万灯の先へ立ち荏原郡入新井村を通行中突然何者にか背後より棍棒を持って殴られ頭筋に長さ二寸と深さ五分の重傷を負され一時人事不省となりしが出張医員の手当を受け帰宅せしが多分人違ひにて此の災難に出逢ひしものならん。

○洋刀を振廻す

十三日午前三時芝区西応寺町五九鍛冶職村上寛次郎方雇人野村勘次郎(二五)は泥酔して荏原郡大井町字三保の途上で洋刀を振廻し通行人を騒がせしより品川署へ引致され罰金二円。

○押倒されて負傷

十三日午前二時頃大森停車場札売場は非常の混雑をなし京橋区南鍋町二の四理髪職横山幾太郎妻お清(二七)は押倒され頭部と面部に重傷を負ふ。

○京浜電車と乗客数

昨年と本年との比較は昨年は乗客八万七千三百二十二入収入金四千七百五十七円本年(昨日)は乗客九万三千二百五十三人収入四千八百三十七円七十一銭昨年に比して乗客の増加は五千九百三十一人。

○警察事故（省略）

明治四十一年（一九〇八）十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上会式余聞

池上は近來になき人出にて夜に入り一層の混雜を極め十一時頃に至りて東京より押出せし万灯は悉く山上に集りたり新橋発列車の如きは午後六時四十分發を始めとして三等客は同列車に乗切れず品川駅に至り三等客を二等室に入る、など何処も人の山をなしたるが品川署臨時出張所なる八ツ山停車場、入新井宿、大森、蒲田、池上等にて取扱ひし出来事は左の如し（以下略）

▲信者の災難

昨日午前零時半頃本郷区本郷四の二魚商金子銀太郎（三十四）は万灯の先へ立ち荏原郡入新井村を通行中突然何者にか棍棒を持って毆打され頭部に長さ二寸深さ五分の重傷を負はされたり又午後二時頃大森停車場売場にて京橋区南鍋町二の四理髮職横山幾太郎妻お清（二十七）は押倒され頭部と面部に五ヶ所の重傷を負ひたり。

▲会式桜を折る

有名な本門寺境内の会式桜の玉垣内へ乗入り今を盛の桜を残らず折取りし不埒者あり直に新橋結社講中の若者に押へられ一旦巡查の手に引渡されたり此の者はカーキ色の軍服を着せし兵士（無帶劍）なりしが住職も気の毒に思ひ懇々説諭を加へし所氣を付けの姿勢にて敬々しく脱帽し果は両手を合せて読経を初め三拜九排の後立去りしが多分精神病者なるべし。

明治四十二年（一九〇九）九月二十二日朝刊（読売）

●癲病者の脱走

（省略）

▲逃亡の理由 之に付き高島幹事語りて曰く「癲病患者室は別に建築したる建物に離隔し置も監獄の如く逃走を予防する必要がないから其設備がしてないので往々逃げ出す者があるが何故此の頃癲病患者が頻々として逃げ出すかと言ふに此程医長光田健輔氏と看護婦石渡コト子が此程癲療養所に転任したるよりどうせ居た所が充分治療もして呉れまい夫より池上本門寺のお会式にでも行くと日に三四円の収入はあるとの考から指折り数へて待つて居たらしいとのことなり（以下省略）

明治四十二年十月十三日朝刊（読売）

●池上のお会式▲昼間の景気、宛然戦場の如し

十二日の池上本門寺の会式は朝来八百八講の信徒が団扇太鼓の勢ひ凄しく繰込む事とて新橋品川両駅を始め京浜電車の雑沓一方ならず、八ッ山京浜電車停留所には華傘附大行燈二箇を設け、南北品川の妓楼は思ひ思ひの附景気盛んなり。例に依つて大森停車場には線路際に丸太囲ひをして臨時札売場を設け、同所京浜電車も踏切に電灯と緑門を設けたり。本門寺山上には観世物小屋飲食店小間物店玩具雑店等所狭まき迄に建並び、釈迦堂並に各參籠所は各講中世話係が詰掛けて裝飾と講中来着に目を廻はし居り、山下の末寺大坊妙玄院中堂院理境院外十六ヶ寺は悉く地方講中の頭を以て充たされ、各飲食店の入口には種々の下駄が行列をやつて居る。山下より大森に至る沿道は名物の麦藁細工柿漬物立花おこし等声々

に客を呼ぶ。品川署は非番巡查総出にて警戒に従事し入新井駐在所池上小学校寺内長栄稲荷事務所を臨時出張所とし、警視庁第三部よりは医員出張して救護に努め、八景園坂下より丹波屋の前までは早朝より車馬の通行を止めたり。夜に入りて生憎の大雨となりたれば参詣人は如何がと思ひの外来るは来るは何の電車も皆満員の札を掲げたり。停車場際の華傘も電灯を附したれば明るき事此上なく大森より池上迄の泥濘をも尻引んまくつた勢物凄くピシヨ濡れになつて万灯を振り立つる兄い連は団扇太鼓の音に連れ跡から跡から押し来り道一杯傘で埋りたり。殊に本門寺の近所は一層の雑沓にて堂上堂下人の黒山蜂のうなる様な題目に押され乍ら、巡查は御苦労にも提灯振り廻て声振り絞り。飲食店は到る所可なりの売行にて模様スシ一杯十五銭と云ふ暴利かたなり本門寺境内には活動写真と娘剣舞が大入なりし。

明治四十二年（一九〇九）十月十四日朝刊（東京朝日）

●夜のお会式

大森停車場から本門寺までいや降りしきる雨の為に道は泥々と成り下駄履の人などは背中まで跳泥を上げ、靴の人は中へ泥が入つてチャブチャブピチャピチャまるで泥鱈のやうな具合に往くわ往くわ男女の群、お万灯は雨に破れて骨に成り団扇太鼓の音ドコドコドコドンドンと天下の公道は俺のものだいと云ぬ許りに日が暮れる間もなく講中が繰込む、蛤、柿、栗、おこしなどは殆ど売れず「え、捨売捨売」と叫んでゐる。

石段から山門、境内は人間の砂を敷いたやう太鼓の音と南無妙法蓮華経の声とが雨夜の空気に重々しく響いて一山の繁昌今が其果と思はれる許り祖師堂の賑ひは最も甚だしく投げつける賽銭に立てた蠟燭が絶間もなく倒れる堂内には爺さんや婆さんの参籠する者多く油煙に交る人の息が風穴のやうに堂外に

吹き出る、やれ何々講だの、何々結社だの、色んな団体の提灯や万灯や火事場のやうに明るく日蓮宗の団結力の強いことを現してゐる円柱の行燈には「一心欲見仏、不自惜身命、我不愛身命、但惜無上道」と書いて四箇の日蓮宗魂を標榜し氣狂やうに数珠を繰つたり太鼓を打つたりして拝み奉る。

釈迦堂も大入で赤雪洞のパツと明るい檀上で説教をしてゐた坊様は雨の如く降る賽銭で顔へ疵をつけられた清正堂も経堂も大黒天も長栄さんも有る堂も無い堂も到る処大雑沓大混雑、活動写真や劍舞までドンチャンドンチャンと囃し立て、東の空の白むまで一天四海南無妙法の信者は騒ぎ立てたお陰で京浜電車も鉄道院も大儲け多分賞与が多からうと云ふが某統計家は例年の半分の人出だと云ふ。

明治四十三年（一九一〇）十月十四日朝刊（東京朝日）

●池上お会式雨の賑ひ

▽雨が降ても南無妙法蓮華經

▽陽気で賑かな太鼓ドンドン

前日来の雨は小止みもなく降りしきり十二日の池上お会式も遂々雨になつて終つた。お会式の雨は毎年の吉例で之を南無阿弥陀仏の方から行くと誠に淋しい秋の雨だが、其処は陽気な御宗旨だけに爺さん婆さんから美しい姐さん達までが尻ヒツからげた勇ましい姿で、団扇太鼓打振り打振り「一貫三百何うでも宣い」と後から後から押出す。

▲大森鬘紙面赤い腹掛陣羽織

されば電車や汽車は朝の程から大混雑、之が皆大森に吐き出されて溝の様な泥路をコチ返しながら車や徒歩で本門寺へ行く其を当込んで田圃道の両側へ狭い小屋を建て列ねた名物沙魚の串焼屋、柿屋、酒

屋、おでんや其他何百軒と知れぬ商人連が何れも空を気づかいひつ、「いらつしやいらつしやい」と呼んで居るお山へ近づくと従つて益々雑鬧、附近の茶屋小屋に陣取つた各講の休憩所で盛んに太鼓を叩いてお会式らしい陽気になつて来たナと其処等を見渡すとヨウ面白い面白い大森鬘や紙の面を売つてゐたり、赤い腹掛け股引やら緞子の陣羽織を着た奴がうろついて恰もお祭の様な有様、賑かなのは是から

▲石段に雨の瀧津瀬滔々たり

二時頃になると雨は愈々烈しくなつて高い高い山の上から石段を伝はつて落ち来る濁流は轟々と音を立て、瀧津瀬の如く渦巻く、これに眩暈して登る者も降る人も鎖や綱に取縋り法蓮華経を唱へつゝ、何れも段の途中に佇んで終つた、程なく小降りとなつたので漸く山上へ登り切つて先づ本堂へ参詣すれば今しも僧侶が交る交る説教し、随喜渴仰する老人、お蠟、線香と叫ぶ若き人などで人浪を打つてゐる、斯うなると益々御利益が有りさうだと皆一心不乱になつて電灯会社の工夫が取つて居る大アーケ灯に手を合せ「妙法蓮華経々々」

▲雨に濡れたお籠の夜具布団

祖師堂、釈迦堂にはお籠りの人が最う一杯、満山隈なく建てられた各講の仮小屋も懸地や供物を積んだりして用意を始めてゐる、斯くて四時五時頃ソロソロお灯明の点く時分になると万灯の先駆連中が到着して「イヤ遠路御苦労様」「ヨー之れはお珍しい」など、お葬式の様な御挨拶を取交して各々太鼓手に手に彼方此方のお堂を参詣し廻る、折柄裏門の方から数両の荷車が来た、被せた油紙を除けると数百枚といふ夜具布団、お籠用として各所の信仰家が持つて来たのだらうが先刻の雨に皆ツブ濡れとなつて居るので、受取つた人めいめいに焚火をして乾し始める勿論お経を唱へながら。

▲清正公の銅像にお供の鏡餅

雨は遂に晴れさうもない「何うせ大した客は取れまいが」と言ひながら活動写真、劍舞、大蛇などの見世物屋が気乗りのせぬ顔付きで小屋掛けに着手した、敷石から這ると沼の様な赤土に足を吸付られるのが難儀さに小暗い足許を徐々左方に行くと清正公の銅像建築事務所があつて、既に銅像は出来上つてゐる、人を掻き分けて恐る恐る像のお顔を見上げ奉ると非常に立派だ、鎧姿の厳めしく法華経旗を後に立て、三本槍を小脇に抱へた清正公の足下に供餅が供へてある、傍の職人が「ナーおい兄弟、清正の足下だから、虎の子餅でも置いたら好いにナ」と洒落たが「馬鹿、虎の子餅ッていのが有るかい鳥の子餅だらう」と打毀されて列居る一同大笑ひ。

▲金盞や石油缶でお経活惚れ

去る程に時間は刻々進行して早くも夜の八時頃になると山上山下一帯に電気、点灯の光り眩ゆく、人はいやが上にも重なり合つてエイオーエイオー押寄せれば俄に四辺賑かとなつて信者連が一年の苦心に成れる衣装様々の大小万灯が三々五々繰込んで来る、すると今度は太鼓ばかりではない、金盞、石油の空缶扱は笛、三味線などに調子を合せお経まじりの活惚れ甚句など滅茶々に陽気になり其中には泥酔や喧嘩も出来て何が何だか理由が分らず去年より人出は少いが池上のお会式は只最う陽気だ陽気だ（○生）

明治四十四年（一九二一）十月七日朝刊（東京朝日）

●お会式の前景気

来十二日は池上本門寺のお会式なれば市内近郷、八百八講の信徒等は各自万灯に意匠を凝らし信徒総

代、世話係り等は目下山上お籠り小屋及び山下末寺大坊妙玄院、中堂院、理境院他十六ヶ寺の割当に奔走中なり、されば当日新橋駅、高架電車及び電気局、京浜電車は何れも臨時列車を増発し京浜電車は例に依り八ツ山停留場に花笠付大行燈とイルミネーションを点じ大森駅は線路際に臨時札売場を設け混雑を防ぐ為め丸太囲ひをなし線路際に五百燭の電灯を点じ京浜電車も踏切に数十個の電灯を緑門を設くる由、又本門寺地内の地割は山上には観世物小屋、各飲食店、小間物、玩具其他の雑店と山下には麦藁細工、漬物、柿、餅、飲食店等あり品川署にては署員総出にて沿道を警戒し警視庁三部よりも医員出張する由なり。

明治四十四年十月十九日朝刊（読売）

●鬼子母神のお会式

府下高田村雑司ヶ谷の鬼子母神は去る十日より盛なるお会式を挙行せるが、昨日はその最終日として人出殊に多く江戸川終点より音羽通り関口台辺は人を以て埋まり、団扇太鼓に打ち交る装ひ美はしき芸妓の姿は終日目白台を彩れり。夜に入りては群集殊に夥しく市内信者講よりなれる万灯はその数二百余个。一旦護国寺に集りて勢揃ひをなし各種の仮装をこらして午後九時題目の声勇ましく女子大学通りを練り行き十時頃境内にくり込みて参堂礼拝等あり。また横浜信者講の一団は午後十二時汽車にて目白駅より練り込み盛なる礼拝式ありて夜半二時過ぎ散会せり。当日は雑司ヶ谷町より境内入口の櫻並木沿道一体に各種の売店軒を並べ例の薄細工の耳づく等は飛ぶが如くに売れ行けり。

大正元年（一九一二）十月五日朝刊（読売）

●御会式と臨時列車

来る二十三日府下池上本門寺御会式執行に付、例年の如く多数参詣者ある見込にて新橋運転事務所にては参詣者の便宜を図らんが為、当日は数回の臨時列車新橋大森間を運転する由。

大正元年十月八日朝刊（読売）

●御会式が近く

△群集中の保菌者

△最も危険な飲食物

栗本警視庁第三課長は曰く、「池上本門寺の御会式も追々近寄つて来たが、今年は一般に豊年だとの評判であるから、平年に比しより以上の参詣者があるだらう是等は東京を中心として近郷近在否近府県から集るので其数は幾十万人の多数に上るであらう、処がコレラ流行の折柄であるからそれが非常に心配でならぬ。

▲お籠で腸胃を害す

何故虎列刺の流行が御会式に関係があるかと云へば、参詣者が終日終夜心願を籠め睡眠不足と食ひ慣れぬ物又は不消化の飲食物に自然腸胃を害するものも多い事と思はれる。此の身体の疲労と腸胃の損傷とは虎列刺病の襲撃に好個の材料を与へこれが発病の誘因となるのだから余程用心をしなくてはならぬ、且つ已に大崎方面には該患者が発生して居るのみならず、茲に尤も注意すべきは菌携帯者又は保菌者の横行闊歩すること、此の保菌者なるものは下痢もせず（以下コレラ記事省略）

大正元年十月十三日朝刊（読売）

● 団扇太鼓の響

△ 池上会式の雑沓

昨日の池上本門寺御会式は前日に掛る好天氣に土曜日とて大当りであつた、早朝から善男善女の参詣引きも切らず夜に入つて殊に人出を増した、本門寺境内の山上には見世物小屋が櫛比して俗悪な樂隊と絵看板の活動写真、忠勇義団一行などと法螺を吹く劍舞など大入であつた、其の間に介在して縁日向の玩具屋、太白飴、豆屋等の露店が相当に客を呼んで居た、祖師堂では正面の階段に丸太と板で坂道に造りくすむだ廊合からアーク灯を一つ下げて周囲の廻廊へは各講中の長提灯を配置した

▲ 狂的信徒

午後七時頃から向鉢巻の威勢のよいのが追々万灯を担ぎ込む団扇太鼓の音は機関銃の発射の如く聞えて日蓮の永い感化を思はずには居られない、六十位の爺さんが赤い長襦袢で尻端折つたのや揃の赤手拭を首に巻いて紙風船を帽子に被り天狗の面をつけてコラサの掛声で勢ひ込むのはいづれも狂的ならぬはない、此等の万灯は祖師堂の前で散々太鼓を叩いた上廻廊を釈王殿の方へ消えて行く、薄暗い御堂の中には御籠がモ―一杯で多くは地方人らしい、裏手の本院では白熱瓦斯の明るい綺麗な広々とした畳の上に品のよい切下が堅まつて若い坊さんの御説教を聴いて居る。

▲ 虎疫と親類の露店

長い石段を下つた山下から大森迄の両側には例の柿屋、鮎屋、栄螺のつぼ焼等のコレラと親類の露店が軒を狭しと並んで居たが警視庁で厳しく取締つたため例年の半分位しか売れなかつた、参詣者もボラレルのを怖れてか虎疫予防のためか此等の店々には立寄らず池上交番附近の堅い料理店が満員の盛況で

御土産には柿より西村千歳屋などの名物立花おこしが羽の生へた様だつた、同十時頃からは遠方の万灯が追々到着し石油缶を叩くのも出て来れり野次馬も加はつて境内は身動きも出来ぬ程、其の割に二箇所の警視庁救護所は暇で病人が着て寝る毛布を休息中の警官が頭から被つて太平の夢を結むで居た。

大正二年（一九一三）十月十二日朝刊（読売）

●本日は池上会式 盛んなる前景気

今十二日は池上本門寺の会式にて、市内近郷近在なる八百八講の信徒は各自万灯に意匠を凝らし信徒総代、世話係り等は目下山上御籠り小屋及び山下末寺大坊妙玄院、中堂院、理鏡院外十六ヶ寺の割当に奔走し当日新橋駅、高架電車、及び電気局電車、京浜電車は何れも臨時列車を増発し京浜電車は例に依り八ツ山停留場に花傘付大行燈とイルミネーションを点じ、大森駅は線路際に臨時札売場を設け混雑を防ぐために丸太囲を為し線路際に五百燭の電灯を点じ京浜電車も踏切に百数十個の電灯と緑門を設くる由にて。地割は山上は見世物小屋各飲食店、小間物、玩具其他の雑店と山下は麦藁細工、漬物、柿、餅飲食店等にして当日品川署は署員総出にて沿道を警戒し池上小学校、長栄稲荷事務所を臨時出張所に宛て警視庁三部より医員出張し病者と非常を警戒し尚当日午前十時より八景園坂下より丹波倉前に至る迄車馬の通行を禁止すと。

大正二年（一九一三）十月十三日朝刊（読売）

●池上の会式賑ふ 近来になき人出

昨日は池上本門寺の会式にて近来になき好天気なるより、朝来善男善女の三々五々隊を組み団扇太鼓の音勇ましく参詣する者引きも切らず、為めに新橋停車場は発車毎に人波を打ち京浜電車八ッ山停留場は人を以て充され品川町より大森に至る沿道は徒歩参詣者踵を接し好天気と日曜なるより昨年よりも人出多く品川署にては山下なる池上小学校を臨時出張所とし山上山下及沿道に数ヶ所の休憩所を設け警戒し、山上には見世物小屋二十七、雑貨飲食店三百六十九、山下には名物麦藁細工を始めとして揉おこし、柿、餅、粟、焼鯊、飲食雑貨店、大森駅に至る沿道両側に出店する者六百以上に及び朝来引続き出店する者増加し午前十一時人出の増すと同時に大森八景園坂下より車馬の通行を禁じ各講の万灯は午後七時より品川八ッ山下に集合し三十分又は一時間毎に一団五列をなし本門寺に向ひ午後より夜に入らんに非非常の人出と雑沓を呈せり。

▲夜に入つて 大変な混雑

池上の夜は万灯が花と咲いた黒粋の一年間を潜んでゐた太鼓の音は、折から一碧快晴の日曜に打突つて、テンテックとヤケに鳴つた大森駅で吐き出された善男善女は二十町余の道を黒潮のやうに流れて行く、両側にはおでん屋、すし屋、柿も並べば風船も浮び、カンテラの油煙、アセチリンの匂ひ、ごつちやになつた空気に呼吸も苦しく、後の月も為めに霞んで見えた、こんな中を何々講としした万灯を押し立て、捻じ鉢巻の若い衆や、赤い蹴出しの新造の群が、太鼓のバチを振り廻すも威勢よく「妙法蓮華經」お題目の声に一杯五錢の爛酒の臭が付いてゐるのも矢張り門徒の有難さだ、路の中央に立つた警官は赤筋入りの提灯を翳して左側励行を叫んでゐるが「足を踏んだ」「いや踏まぬ」などに争ひは絶間がない、それでも信心の御蔭からか救護所にも大した事故は起きなかつた。山門前には電気で飾つた大万灯が燦然と碧玉の如く輝いて「どうだい素晴らしいもんぢやないか」と一様に見上げては通る京浜電気鉄道の

献灯だ高い高い石段これにはいづれも大弱りで、ソロリソロリと足許に気を配って上下するが、その間の長いこと焦れつたい様だ、境内に立つと満山之れ太鼓の音、髭題目の赤い小旗と一天四海の万灯の光、シューツと臭い匂ひと音を立てながら新派悲劇のフィルムは展開されて行くし、小さな提灯をブラサゲながら尻を端折つたお爺さんは猿芝居の与一兵衛だソアソアした魂はこんな所へ来てこんなものを見て喜んでゐる、テンテンツクテンドンドン——爺さん婆さんは、ムニヤムニヤと口を動かしながら流石は熱心に日朝尊者や清正公さまなど小さな御堂の十四五を廻り歩く釈迦堂祖師堂の大伽藍も見渡すかぎり人の頭、蠟燭の光りは幾つとなく揺らめいて頭越しに飛ぶ賽銭はひつきりなしに音を立ててゐる格天井の大広間には合掌瞑目の善男善女、テンテンツクテンドンドン——この獣皮から発する音響に一山の秋の夜が更けて行つた時畏み籠つた人達は一天四海皆妙法に帰すだらう。

大正三年（一九一四）十月十三日朝刊（読売）

●雑沓を極めしお会式 善男善女雲集す

十二日は池上本門寺の会式なるが朝来の好天氣に待に待たる八百講の信徒達は善男善女三々五々打連れ立ち団扇太鼓の音勇ましく押出し、午前十時頃よりは人出順に増し京浜電車八ツ山停留場新橋品川の停車場は発車毎に非常の雑沓を極めたり。池上山上には活動写真二十八、玉乗二、猿芝居一、男女改良劍舞十六を始めとして雑貨飲食店等所狭き迄出店し釈迦堂及祖師堂は何れも信徒で埋められ山下は例によつて名物麦藁細工を始めとしておこし、焼鯊、漬物、柿、栗、黄金餅など大森停車場に至る迄かけ連り山上下の出店総数実に三千八百余軒の多きに達し殊に出征軍人の遺族及知人の参詣する者多く、夜に入つては大万灯の練り込むもの引きも切らず夜を徹して雑沓を極めたり。品川署にては他署よりの応

援を求め山下池上小学校及入新井駐在所を臨時出張所に当午前十一時より大森八景園坂下にて馬車止を為し非常を警戒せり。

大正三年（一九一四）十一月十五日朝刊（東京朝日）

●お会式の賑ひ

▽秋晴の小湊誕生寺 人出約二万と称す

秋も漸く闌ならんとする十二日東海の靈地房洲小湊山誕生寺の御会式は予定の通り執行されたり。此日朝来天空一片の雲影を留めず吹く風さへいと心地好く絶好のお会式日和なりしかば近郷近在より善男善女の参集する者夥しく正午過ぐる頃より一層人出を増し東は勝浦、西は鴨川より幾多の信徒を乗せたる乗合馬車の往復引も切らず、又海路勝浦、鴨川より汽船に依り上陸するあり同山正面なる総門前は非常なる雑沓を極めたり。総門を潜りて山門を抜け祖師堂に至る両側には名物鯛煎餅を始めとし誕生おこし橘羊羹其他小間物、化粧品、日用品等各種の露店総計三百余軒隙間なく立並びて何れも相応の売行あり、境内を外に街道の片側なる並び茶屋の姐さん連今日を晴れと紅白粉に粧ふて客を呼び止むる声は聾にも成りさうなり平年なら境内の此処彼処に活動写真、壮士芝居、娘剣舞、浪花節などの興行物ありて打鳴す楽隊、鳴物賑々しさ言はん方なき状況なるに今年は如何した風の吹き回しにやソンの興行物としては一つもなく只永井兵助の居合抜き、松井源水の独楽の曲芸等が呼物となりて群集を引寄せたる位に過ぎず境内の本師堂、靈玉殿、誕生堂は房総各地の信徒にて充され混雑名状す可からざるものあり、此日鴨川署にては境内に出張所を設け数名の警官を特派して警戒を加へ居たり、午後三時過ぐる頃より貫主今井日誘師導師として以下房総各門末寺院僧侶数十名何れも盛装を凝らし濃艶花の如き稚児数名

を随へて庫裏より棧橋を渡りて本堂に昇堂し法灯輝く辺りに於て経文を誦誦し式を終れり。夜に入りては各講中の絵万灯に団扇太鼓の音賑しく一団又一団と揉み込み来り其壯觀と混雜とは更に夥しきものあり、祖師堂前面には特に有志の寄付にかゝれる一千燭の電灯（外房電気会社の供給）燦として輝き渡り一層人目を惹けり祖師堂内には徹宵参籠の善男善女鮎詰となり夜更くるまで僧侶の法話あり、附近の旅館清海屋、山口屋、伊勢屋其他二三は何れも参詣客にて大入大繁昌の大景気なり（十二日夜十一時小湊にて）

大正三年十二月十三日朝刊（東京朝日）

● 団扇太鼓の響き

▽ 小松原山のお会式

房州東條村小松原山鏡忍寺の会式は既報の通り十一日初日として執行された何がさて外房切つての名刹でもあり且古来から日蓮遭難の霊地として一般に渴仰されてゐる丈に、当日朝来至つて陰鬱な空模様であつたにも拘らず近郷近在は言ふに及ばず遠く京浜地方よりも信徒の来賓あり相当の賑ひを呈した、例に依つて境内には幾多の露店隈なく櫛比し壮士芝居、活動写真、手品居合抜き等あらゆる興行物杯盛に客を呼んでゐた祖師堂、清正公堂では信徒の打鳴らす団扇太鼓の音が八釜しく響いてブカブカドンドンの楽隊騒々しいこと夥しく耳も聳せんばかりである。正午過る頃花万灯や幟を先頭に「誕生講」「小松原講」の各団体が威勢よく題目を唱へつつ境内に繰込み来りやがて午後の三時と云ふに貫主常岡諦道師導師として以下門末僧侶一同を随へて濃艶花の如き装ひを凝した稚児数名と共に本堂より祖師堂に仮設した棧橋を渡り昇堂の後法灯煌々たる辺に於て予定の経文を誦誦し更に祭文、放鳥等があつて同五時

莊嚴の裡に式を終つた。一段と小高い鐘楼から瞰下とさしもに広い境内も全く人の海と化してゐる。鳥打、中折、島田、銀杏返しなど押し合ひ圧し合ひ恰も芋を洗ふが如く肩摩殺撃正に立錐の余地もない状況、下馬門前の四辻には勝浦、和田、天津、鴨川等よりの乗合馬車、人力車数十台入れ替はり立替はり景気好く賽客を運んでゐた、更に境内の一隅には市場係事務所を設け其れに隣して鴨川署出張所もあり数名の警官之れに控へて取締を加へてゐた。夜に入りては一千燭の電灯燦爛として輝き渡り祖師堂内では有難き僧侶さんの説教が開かれ参籠の善男善女等は徹宵熱心に耳を傾けてゐた（十一日夜十時小松原山にて）

大正四年（一九一五）十月十三日朝刊（読売）

●雨の御会式 十二日池上にて

十二日の池上本門寺御会式は雨の為め全潰れの姿で、大森駅前から八景園へのガード下りはまるで堤の切れた大河、本門寺へ二十町の道は水田の様な泥濘、法外な金を取つて行交ふ俵屋の威勢だけが良かった、京浜電車が大森駅に設けた天幕張りの接客所も万灯を飾つた宝翠楼も沿道を埋めた例の柿も浄国橋先から櫛の歯の様な飲食店も境内山上山下の興業物も客は皆無で晴れやらぬ昼の雨を残念げに眺めるばかり、団扇太鼓の音さへ絶えて淋しい午前はずんだ。夫でも本門寺の本堂では亀の如く御会式の法要を朝から丁重に営んだが札売場も御籤所も午前中はまるで人立がなかつた。

大正四年十一月十四日朝刊（東京朝日）

●小湊山のお会式 天童音楽と法要

日蓮上人誕生の靈蹟房州湊村小湊山誕生寺の会式は例年の通り去十二日を以て施行せられた。是より先同山では境内に様々の設備を施し殊に御大典奉祝の為総門と仁王門との中間に緑門を設け電光旗を点じて一層の光彩を添はしめた数日来しとすと降り注いでゐた秋雨も十二日は暁来小止みとなつたがどんよりと曇つた空模様は陰鬱を極めて信徒の来賽を少からずそがしめた、午後三時といふに折から打鳴らす用意の第一鐘に法要は開始された、次いで第二鐘を以て整列第三鐘を以て出仕と爲る、貫主今井日誘師は紫衣緋金襴の七條を纏ひ以下執事の本城端量師、役僧二名房総末寺数十名の僧侶並に諸講中を随へて特に設へた長廊下を笏筆築の笛の音に和しつづつ行列を先頭に静々と祖師堂に昇つた、斯くして法灯煌々たる御仏の御前に於て式が行はれると有栖川宮家の御代参御宝前拜礼、唱題、開帳、回向があつて後更に特別法要が行はれ同五時過る頃莊嚴の裡に法要は終りを告げた。境内並に総門外には例に依つて幾多の露店が盛んに客を呼んでゐたが御大典と雨の崇りで余り繁昌せなかつたやうに見受られた。それでも名物の鯛煎餅、誕生おこし、橘羊羹等は相応の売行があつたらしい、所轄鴨川署は境内の一隅に出張所を設けて取締りを加へてゐた(十二日小湊にて)

大正四年十二月十日朝刊(東京朝日)

●小松原山の会式

日蓮上人四大難の靈跡たる房州東條村日蓮宗小松原山鏡忍寺のお会式は予報の如く明十一十二日の二日間(雨天順延)施行さるる筈にて同山にては総ての準備を整へ各種興業人露店商人等は現に同山境内に夫々地割を為し小屋掛けの最中なるが十一日は土曜日十二日は日曜日に当るを以て天気さへ好からん

には定めし遠近より信徒の来拝する者多からん。

大正四年十二月十三日朝刊（東京朝日）

●小松原山の会式

日蓮上人四大難随一の靈跡と称せらるる房州東條村字小松原日蓮宗小松原山鏡忍寺のお会式は予報の如く十一日より施行せられた、此日暁来陰鬱な空模様で午前中はあまりに人出がなかつたが正午過ぎる頃からは追々と繁くなり午後三時頃にはさしにも広い境内も七分通りは人を以て埋まつて了つた、例に依つて午後の三時三十分頃貫主常岡諦道師は白衣緋金襴の袈裟を纏ひ以下各自盛装を凝らせる門末各寺院役僧等を随へ濃艶な扮装を凝らした稚児並に樂人等を先頭に笙箏の音に和しつつ本堂より特に設へた長廊下を通つて静々と祖師堂さして昇つて行つた、やがて法灯輝く仏前に於て予定の経文を誦し五時式を終り再び行列を作つて件の長廊下を本堂に戻つた、境内には各種の露店や屋台店が盛んに客を呼んでゐたが余りに売行き好ろしからぬやうであつた、其他活動写真や壮士芝居なども小屋を掛けて觀客を呼んでゐた夜に入りては祖師堂に於て僧侶達の法話が聞かれたが此処には遠近から集まつた老若男女が沢山参籠して徹宵お題目を唱へて随喜の涙に咽んでゐた（十一日夜十時小松原にて）

大正六年（一九一七）十月十三日朝刊（東京朝日）

●池上お会式 参詣の大群衆

昨十二日は池上本門寺の会式に参らんとて院線又は京浜電車にて来り団扇太鼓の音勇ましく同寺に押

寄する信徒午前七時既に一万を超え尚刻々人出を増しつつあり同寺祖師堂にては午前四時磯野大僧正七十余名の僧侶を随へて法華經一部八巻を誦し參詣の善男善女の誦行之に和して莊嚴を感じしめたり池上大森間の沿道には名物の柿栗等を並べる露店五十余軒を初め各露店、又山門前両側には各飲食店出店し山内も亦玩具其他の露店にて賑ひたり尚本堂にては午後より村雲婦人会の總會を開き同会布教団も出張し会長代理松森美雲師風水害に關する布教演説を試み篤志家よりの寄付を募集せり又神田八講にても釈迦堂に風水害罹災民救助寄付取扱の旨を貼出せり夜に入り雑沓益々甚だしく品川署にては非番総出にて警戒を加へたり。

大正六年十月十三日朝刊（読売）

●お会式の賑ひ 正午迄のお賽銭金千円也

池上のお会式は十二日、昨年の露店禁止が許りたので曙橋下から本山の門前まで約四百両側に真赤な柿や栗をズラリと並べ、その間を善男善女の黒い流れが、テンツクテンツクと繰込む、その中には帝劇女優の小原小春と初瀬浪子のあでやかな色彩も点じられた——この朝八時貫主の磯野日延大僧正が末寺の本坊本妙寺以下十四ヶ寺の住職門弟八十四名を率ゐてお会式報恩があつたのは例の通り、そしてお賽銭は正午までに千円に上つたが、山門前には救世軍の向ふを張つた慈善樽が三つ、これは災害地への寄付ださうな、夜になると満山人の波を、万灯の連り団扇太鼓の音も一際高く、新たに設けられた講社の部屋には約一万の人が泊るといふので、このところ一天四海皆帰妙法

大正七年（一九一八）十月十三日朝刊（読売）

●お会式の賑ひ

秋の行事池上本門寺の御会式は生憎と朝来の雨に出鼻も挫かれ午前中の人出は極めて少なく鉄道院や京浜電車の各従業員も大分手持無沙汰であつた従つて沿道の露店も少なく山門も観物小屋が十軒計りに過ぎなかつたが午後からの晴れで善男善女の群は次第に殺到し夜に入つての雑沓は例年に増して見へた一方本堂では午前四時半の一番鐘、続いて五時の二番鐘で日延大僧正以下三十名の僧侶が懇ろなる読經を籠め午後二時にも同様読經があつた今年は祖師堂に至る廻廊並に講部屋の完成を告たので各講中は後から後からと此の新講部屋へ雪崩込で居た只連日の雨で大森池上間の泥濘は言語に絶し女子供の履物を台なしにしたのが相續いて居た。

大正八年（一九一九）十月十日朝刊（読売）

●お会式と電車

来十二日池上本門寺、堀の内妙法寺お会式に付き院線電車東京新宿間、同桜木町間、品川桜木町間並に市内電車品川須田町間は終夜運転をなすべし

大正八年十月十二日朝刊（読売）

●コドモノシンブン 御会式

今日は、池上の本門寺で、お会式があります。「南無妙法蓮華經」を口口に唱へて、お籠りに行く人で、芝や品川や大森は賑かなことせう。万灯の灯と、太鼓の音とは心を浮々させます。今夜から明日の朝

まで、このお祭り騒ぎは、毎年のやうにつづくのです。

大正八年十月十三日朝刊（読売）

●雪崩込むだ群集院電に轢かる

本門寺お会式の大椿事

身元調査中の即死者七名

重軽傷者は月岡病院へ

（本文略）

大正八年（一九一九）十月十三日朝刊（東京朝日）

●お会式帰りに大森駅外大椿事

雑沓の結果群集線路内に雪崩れ込み

幕進せる上り電車に薙ぎ倒され即死十一名危篤一名

（本文略）

大正八年十月十四日朝刊（読売）

●演芸あさぎ幕

▲御会式の前

早稲田の国劇部で「日蓮上人」を出すと近所の若者が毎日押掛けてデンデコデンデコの手伝ひをする。これは近日ある雑司ヶ谷の御会式の時の練習だ。

大正九年（一九二〇）十月十三日朝刊（読売）

●満山を揺るがす題目の声 曇空で人出は減つたが池上一夜の賑ひ

十二日は池上本門寺の会式である朝来の曇り空に午前中は思はしい程の人出もなかつたが午後になつて可なりの雑沓を増した大森分署では支部を池上小学校横手に設け、非番総召集で警戒に当り、午前十一時から池上大森間の乗合馬車、人車、諸車等の通行を禁止した。一方本門寺境内には京浜電車が例により巾一間横三間の「お会式」と記した大額を掲げ、祖師堂では供養塔をたて、午前四時半の第一鐘で読経が始まり、第二鐘で祖師の衣替へ、貫主磯野日延師衆僧を率ゐて昇殿、懇ろな勤行を済せた万灯は品川署へ届出たもの計りで二百に上つた夕方からぼつぼつ雨が降り出したがお籠は神田八講十講を始め都下及地方からの参詣人で例によつて賑ひ合つた

大正十年（一九二一）十月十二日朝刊（読売）

●お会式と電車

品川須田町間終夜運転市電気局では例年の如く十二日の池上お会式の当日は乗客の便利を計り品川須田町間は車輛四十台を終夜運転させると

大正十年十月十三日朝刊（東京朝日）

●賑はつたお会式 電車は鈴生り終夜の大混雑

前日からの好天氣に往来もスツカリ乾いて昨日今日池上のお会式は大変な賑ひ、それに陽気も暖かいので夜に入るや市電、省電、京浜電車で本門寺に繰出す者頗る多く市内各講中の趣向を凝らした大万灯は例に依り威勢のよい職人達に担がれ団扇太鼓や三味線などの華やかな鳴物入りで八ツ山に勢揃ひして品川街道を練出す、十時頃から空は稍曇りを見せたが、雨に濡れるもお会式の吉例と一向めげぬ人々で大森からの細い道は終夜大混雑を極めた、それに本年は柿や栗の出来栄もよく沿道の商人も大層景氣ついでゐた

大正十年十月十三日朝刊（読売）

●秋晴れに賑ふ池上のお会式

日蓮上人七百年忌に相当する池上本門寺の御会式は折柄の秋晴に朝来各講社其他の参詣人達を接し之れが為品川署大森分署では非番員総出となり各署応援の一千名の警官隊で沿道を警戒し同町青年団員も又交通整理其他に従事したが夜に入つては一層の人出で大森署では此の日の人出を約二十万人と見積つてゐた

大正十年十月十三日夕刊（東京朝日）

●今夜の人出は三十万との予想

池上本門寺御会式の素晴らしい前景氣

警戒巡查千五百

快晴な秋日和の今日池上本門寺の御会式は早暁から大森、蒲田両方面から詰め掛ける群集で参詣道は非常な雑沓である山門前から境内に集まる善男善女正午前既に一万五千余を数へ門前附近の司令部には大塚大森分署長三百二十名の警官隊を指揮して交通整理に汗を流し「此調子では夜間三十万からの人出だらう」と思ひ遣れる熱闘を語る混乱の中に紫色の旗が講中の名を記して翻り、法鼓の響きが晴れの御会式に馬鹿景氣を添へて群集をそそり立てて居る今年の本門寺の百年祭で而も一兩年を雨で崇られたので今日久し振の快晴と相対つて景氣を溢らうの講中が乗氣につて百名、二百名の大団体が約二百団体ほど所轄署へ届出て万灯の数も無数である。本門寺に向ふ人出は刻々加はつて一時過ぎには三万以上になつた、此人出を運ぶ電車は省線も京浜も大混雑で、省線は品川、大森、蒲田に臨時札売場を設けて居る、臨時増発も平素の十二分間置きを六分間毎に短縮増発することになつた、電氣局でも今年は特に品川、田須町間に終夜運転をなし京浜も之に倣つた、警視庁でも此素晴らしい景氣に先年大森の惨事をも鑑みて特に交通整理隊を組織し小林警務課長が指揮官となつて警官十名を出動させ、品川署も別に百八十名を出す、大森の三百二十名を加へると実に千五百名の警官出動である。此賑ひで蘇つたのは露店商人で此日は特に山門附近の店が多かつた

大正十一年（一九二二）十月七日朝刊（読売）

●お会式の取締り

来る十二日は池上本門寺のお会式だが当日は例年の雑沓に鑑めて警視庁では左の五ヶ条の取締りを発

表した

- ▲万灯には各区の町名を附し其他何組何講と明記し責任者は左胸に赤い記章を着ける事
- ▲万灯は小形にして一人にて持ち運びの出来るものに限る事
- ▲酒気を帯び平素暴行の癖ある者は参加せざる事
- ▲ナイフ小刀棍棒ステッキ等は所持せざる事
- ▲棺桶の如き又は骸骨に等しき其他類似のものは絶対に禁止す

大正十一年（一九二二）十月八日朝刊（読売）

- コドモノシンブン お会式
かうコレラ騒ぎでは、団扇太鼓に、カラ景気もつきますまいが、お会式は、十二日です。

大正十一年十月九日朝刊（読売）

- 新電車 本門寺の御会式を前に 蒲田から池上迄開通
△昨日華々しい開業式Ⅱ二期には調布まで
十二日の本門寺お会式を前にして省線蒲田駅前から池上本門寺下迄の電車が開通し八日朝野の名士を招いて華々しい開業式を挙げた。蒲田から大森つづきの新井宿、池上、調布、洗足方面へかけて新住宅が盛んに出来て所によつては大森駅へ出るよりは此線を利用し蒲田へ出る方が良い人が大分多いので六日試運転当日から有料乗客六日は八百四十五名、七日は九百六十五名といふ景気だ、蒲田池上間往復

十三銭一年定期だと往復一銭弱に当る。省線式の綺麗なボギー車で少しも動然しない良い電車だ、窓の外には青い山が連り富士も見えて良い眺めである、朝五時から夜零時五分迄の間二十分おきに蒲田を出る此完成は池上鉄道会社の第一期工事、二期には池上から更に調布村嶺駅迄約三哩延びて行くさうだ、大正六年に会社が出来てから財界のガタ落ちで大部苦しんだが兎に角電光石火的に出来上つてしかも上等な電車が走るのを目出たいお会式には定めし混む事だらうが本門寺の喜ぶ事夥しく「善男善女日に日に来るものの幸福」といふやうな祝辞を読んで此際大いに感謝してゐた

大正十一年十月九日夕刊（東京朝日）

●真性更に十六名 お会式大警戒 恐ろしい昨夜の雨

防疫官が必死の努力も裏切られてコレラ患者は続々発生し八日も真性十六名を出し累計百三十名疑似六名に達したが、昨夜の降雨もコレラ菌に取つては此の上も無い繁殖力を強め警視庁では上水路に塩酸を投じて水道消毒に尽し来る十二日池上本門寺の御会式には所轄署と警視庁が協力して参拝者の濫食やお祭り騒ぎの行列等雑沓に於ける衛生上の厳戒に在郷軍人青年団の後援を得て取締ることとし各講へも注意したが更に露店は勿論附近の飲食店も注意することとなつた其後の真性患者左の如し（以下略）

大正十一年（一九二二）十月十二日夕刊（東京朝日）

●お会式と各電車の終夜運転

明十二日は池上本門寺の御会式に就て市電は品川、日本橋、須田町間を京浜電車池上電車は全線を又

省線電車は東京駅新宿間品川大森間を各終夜運転を行つて参詣人の便利を図る由

大正十一年十月十三日夕刊（東京朝日）

●日蓮上人大師号宣下にお会式一層の賑ひ コレラの心配で大警戒

けふは池上本門寺のお会式で殊に日蓮上人へ大師号宣下のともあり熱烈な信者の参詣賑は今晚来凄じく午前四時二十分初発の京浜電車は既に満員、一台置きに運転される新設池上停留所行臨時電車は二十分毎に二百三百の群集を吐き出す、コレラ流行も何のその講中の大旗大万灯が林のやうに本門寺の段階を埋め、警視庁では警戒が時節柄大森分署の手にのみ任せておけないとあつて大森本署から臨時招集の非番巡查百名、夕方六時から夜の混雑を慮つて更に品川署から約百名の巡查を応援せしめ沿道飲食物店殊に露店商人に対しては昨日中に告示ビラを渡しコップ一杯売の蜜柑水アイスクリームその他危険なものは厳禁し救護所には万一の場合に備へて消毒剤の用意をなし吐瀉卒倒者等は必ず一時救護所に留め置くことになつた、救護所の司令部は大森小学校に置き例年になく緊張した警戒を行つて居る。尚交通整理としては道路の中央に大杭を立て、左側通行を厳行する他警視庁から二十名の交通巡查を派して遺漏なからしめて居る。正午参詣人の数は無慮七万

大正十一年十月十四日朝刊（東京朝日）

●真性二名 一人はお会式に行く途中で

府下南葛飾郡亀戸町三七五六ボール箱製造業服部弥吉方雇人岩瀬政男（二七）は十二日夜池上の会式

に行く途中品川で吐瀉し同町海浜病院で加療中十三日朝七時死亡検便の結果同午後八時真性と決定した
又荏原郡品川宿品川町二日五日町六六大工職都築郡八(二七)は十三日午後八時真性と決定

大正十一年十月二十五日朝刊(東京朝日)

●お会式の帰りに墜落 土工の溺死体

二十四日午前七時頃小石川区市兵衛河岸一番地先に土工体の男の死体が漂着顔と頭部に傷があり他殺の疑ひで富坂署で取調べたが午後二時右は赤坂区檜町一〇高野義行(二六)と云い去る十八日深更雜司ヶ谷の鬼子母神の御会式の帰途泥濘の余り江戸川に墜落溺死したものと判り死体は家人に引渡された

大正十二年(一九二三)十月十一日朝刊(東京朝日市内版)

●本門寺お会式 例年通り行ふ惨死者追弔も

今回の震災に際し池上本門寺の御会式は取止めになるだらうと伝えられたが是は一部の風説に過ぎず例年の通り本月十二日十三日の両日施行せらるゝ筈で十二日の午前九時より十三日午前中に亘り報恩会を行ひ十三日午後より震災惨死者の一大法会を行ふ事となつた

大正十二年十月十一日朝刊(読売)

●お会式は例年の通り行ふ

今年池上本門寺の御会式は取やめになると伝えられたがこれは一部の風説で例年の通り十二十三の

両日施行する。そして本日の午前中に亘つて報恩会を行ひ十三日午後から震災に依る惨死者の大法会を行ふ事となつた

大正十三年（一九二四）十月五夕刊（東京朝日）

●お会式電車終夜運転す

十二日は池上本門寺のお会式なので当日省線電車新宿品川、東京品川及び京浜間は終夜運転をして参詣客の便宜を図る筈

大正十三年（一九二四）十月十二日朝刊（読売）

●夥だしい人出を予想されるけふの御会式 — 警視庁が大警戒

池上本門寺のお会式は今十二日であるが例年の通り参詣者で賑ひを見せるだらうが殊に本年は震災第一年のお会式の事として一段と夥しい人出が予想されてゐる警視庁では午後五時から品川八つ山市電終点、大井町活動写真館、大井館、大森駅、入新井美奈児派出所、池上小学校、蒲田駅の六ヶ所に警、医二名看護婦一名助手一名から成る救護班を特設して傷病者の救護に努める外兵庫県尼ヶ崎にベスト数年以来間もない事として六日以来池上を中心として防疫隊を組織して井水河水の消毒を励行してゐたが当日は救護班と協力して一覽各種の疫病予防に努める筈

大正十三年十月十二日夕刊（東京朝日）

●あすはお会式

震災後初めてなので大変な賑ひらしい

市電も省電も終夜運転

十二日は池上本門寺のお会式だが今年には震災後初めてのことではあり、夜をこめての参詣者が夥しいものと予想して東京鉄道局では十一日までに乗客に対する手筈をすっかり整へた当夜省線電車は京浜線桜木町東京間、山手線は新宿品川間、中央線は東京新宿間の終夜運転を行つて参詣者の便利を図るほか大森、蒲田その他主な駅には臨時出札所や改札口などを設け、一昨年同日大森、蒲田だけの乗客数二十万人の実数から推して今年はより以上の見込で準備した、又警備の爲めには東鉄局からは高久旅客係長以下、新橋運輸事務員全部約二百名が部署に着き大森と蒲田両駅には保健課から医師看護婦等の救護班を出す、又市電は品川須田町間、京浜電車は本線全部何れも終夜運転を行ひ警視庁では大森署と協力して三百の警官総出で交通整理に当り、衛生部からは救護班を繰出させる、殊に同地方面は先頃腸チフスを極めた処として特に防疫官吏をも出張させる

●雨らしい明日の日曜 但し大した事はない

秋色いよいよ濃かに、一日の郊外行楽には絶好の季節になつて来た明日の日曜は海に山に定めし多くの人が期待してゐることだろう、それに二年目初めての池上御会式でその沿道は人出で沸返りさうだがお天気のことを気象台に聞くと琉球の西の方にある小さい低気圧がだんだん北東に進んで来て十一日の午前中にはもう鹿児島熊本方面は雨で紀州の串本潮岬は曇つて来た十二日(日曜日)は先づ七分通り東京附近一帯は雨になるらしい但し大した雨ではなささうだから傘の用意さへして行けばよからうと云つてゐる

大正十三年十月十三日朝刊（読売）

●品海を庄した団扇太鼓

—お会式の人出四十万—

—震災後二年振の賑かさ—

池上本門寺のお会式は震災後二年振りでもあり朝のうちから練り込む講中や一般参詣人の混雑は警視庁の調べで午後八時迄に三十八万人と数へ上げられた程で大森から先池上迄の道路は歩くと云ふよりも押されて行くと云ふ方が当つてゐる位それから深夜にかけて折柄降り出した小雨などものともせず出るわ出るわ八ッ山からさしにも広い新国道も人波で埋められ長蛇の如く池上へ続く省線も満員鈴なりの信徒を乗せて間断なく池上へ送り込む団扇太鼓に題目の声は品海を庄して賑かのなんのつて近年にない騒ぎ中にも衣類から脚絆まで白装束の背に六字の髭題目を書いた信徒もあれば揃ひの法被背にねぢり鉢巻の威勢のいいのもある、警視庁では池上小学校内に出張所を設け土地の青年団員や在郷軍人と協力して警戒したが賽銭泥棒が九人、掏摸が一人検挙されたのは仏罰でがなあらう又新井宿四六八石飯野三造（二七）は喧嘩して頭部に傷を負ひ布教中の仏教大学生徒三名が講中の連中と衝突して袋叩きにされるなど飛んだ余興もあつたが大した事故もなく夜の明けるまでドロスコンドロスコドンの音本門寺の全山を騒がしてゐた

●万灯に斬込み二名を殺傷す 品川黒門横丁の惨事 群集に紛れ犯人逃走

東京から東海道筋を練つて繰込む万灯隊の数が、殆ど頂点に達した十二日夜十一時二十分頃、折柄芝白金講中の万灯が景気好く品川黒門横丁先へ差掛つた時、突然路傍材木置場の陰から怪漢飛出し短刀を閃かして同講中の万灯を振廻して居た同区白金三光町二五佐藤国夫（二二）に斬つてかかり講中の

捻ち鉢巻連が呆気にとられぬ間に国夫の胸部を刺して即死せしめ、混雑中に居た住所不明並木重次郎(三〇)の背部にも重傷を負はせて群集に紛れ逃走した。突然の樁事に沿道大変な騒ぎとなり、品川署から係官急行、被害者二人を現場前の品海病院に収容し一方八方に手を分けて犯人を捜索中である。

大正十三年十月十四日朝刊(読売)

●お会式の人殺し巡查宅へ転込む

十二日夜十一時十分頃芝区白金三光町二五佐藤国夫(二一)が池上本門寺のお会式で万灯を担ぎ品川黒門横町品海病院正門前に差掛つた処折柄同正門傍を通つてゐた市山雷天子分住所不定壮士並木重次郎(三〇)と衝突し口論となり並木は短刀を以て佐藤の胸部腹部を突刺し即死せしめ其場を逃走したが直ぐ其足で蒲田居住鈴木巡查部長宅へ其事情を訴へて飛び込んだので同巡查部長は十三日午前十時同人を伴ひ品川署へ同行目下同署で取調中

大正十三年十月十四日夕刊(東京朝日)

●池上惨事の犯人逮捕 被加害者とも天雷の子分

十二日夜池上本門寺のお会式に参詣の途中惨殺された芝区白金三光町二五佐藤国雄(二一)の加害者は住所不定博徒並木重次郎(二六)と判明、品川署で厳探中の未十三日朝六時頃逮捕したが被害者共通に渋谷で惨殺された市山天雷の子分である原因は万灯のことからであると

大正十三年（一九二四）十月十三日朝刊（東京朝日）

●万灯が貧しい 団扇太鼓の群れ

震災後初めての池上お会式

日蓮宗の総本山本門寺のお会式は昨年震災でとりやめたあとのことではあり、朝の時雨を物ともせず、近郷近在から集まつた信徒衆で十二日の終日終夜、池上長栄山の杜には団扇太鼓や鉦の響に「妙法蓮華経」のお題目の唱和が錯然とこもり、紅白の花を飾つた万灯に秋の色とも思へぬほどに賑はつた、それが夕近くなるにつれて省線電車や京浜、目黒、蒲田の各電車から降りる老若男女の参詣人で池上田圃を埋め沿道の交通整理と露店商人の客呼ぶ声でお祭気分が濃厚になり、長夜の帷が降ろされて肌寒を感じずる位の八時頃には、東京市内各街々からは花橋の紋所入れた高張提灯の一丈余りもある万灯翳した、威勢のいゝ哥兄連が景気よく揃つて繰り出すので品川宿はゴツタ返す、その賑やかさを見物する為めに集まつた人達が、月の光に輝かれて物凄じかりの混雑だ、しかし震災の影響をうけてか、今年は金目の入つた凝つた万灯は少く、多くは鉦太鼓に汗水流して景気を添へる講中が大部分だ、と見ると蠟燭の灯明るく捻鉢巻に腹掛け姿の連中がトラツクに打ち乗つて人波打つて蠢く人々を尻目にかけて乗込むなど、流石の日蓮も六百年前このことありとは思はなかつたらう、トラツク団には博文館の職工さんなども交つてゐた、かやうに電車で徒歩で秋の一夜を本門寺へ本門寺へと集まつた信徒の数は少く見繕つても三十万を下るまい。

お寺やお宮の祭りも最近はどこも甚だしく寂寞になつて行くのに、ただ日蓮宗の本山だけがいつの世になつてもかくまで盛大に衰微の色一つ見せないのは何の故だらうか、誰にも一寸小首を傾げさせられるが、今日でいへば後藤新平子のやうな偉いお坊さんがうまく信者の心を掴んで全国津々浦々にまで講

社を設けさせあの勇躍的な鉦太鼓でお題目を高唱させる政略がうまく凶にあつたのが一つ、それから我を忘れて万灯の下に各講社の血気な信者達が豪勢を競ふことから、次第にその万灯も神輿と同様に華美を競して一頭地を抜いたものを本門寺に担ぎ込んで他の講社連を驚かすといったやうな他愛もない競争心理が手伝つてゐることも争へまい、兎もあれ、六百年前に入寂した豪僧日蓮も十月十二日の夜だけは地下で「これ見たことか」と黒衣をまくつて居るだらう。

大正十四年（一九二五）十月八日夕刊（東京朝日）

●お会式終夜運転

来る十三日は池上の本門寺の御会式に当るので昨年大森駅が二十万蒲田十六万の乗降客に大混雑を来したのに鑑がみ東京鉄道局旅客課では十二日夜京浜桜木町東京間、山手線は品川池袋間、東京中野間の終夜運転をなす外、湘南列車は大森駅に停車し更に蒲田大森両駅には仮ホーム出札所を特設

大正十四年十月十日朝刊（読売）

●本門寺のお会式 けふから四日間行はれる

池上の本門寺では、例年の通り十日から十三日に至る四日間にわたり、お会式を行ふ。十一日のお速夜からは、連日読経があり、十三日の午後には奏楽稚児供養がある当日は例により三四十万人の出入を見るべく、寺務所では万端手筈をして、待ちかまへてゐるが、鉄道省でも、関係省線電車を終夜運転せしむべく、それぞれ準備をしてゐる。

大正十四年十月十二日朝刊（読売）

●今夜大警戒のお会式 市電幹線は終夜

池上本門寺のお会式は愈々十二日からだが警視庁では市内各署の非番巡查を召集して品川、大森蒲田各署に応援させて雑沓を取締り市内電車は十二日須田町品川間の幹線は終夜運転し十三日は堀の内会式の為め新宿堀の内間蒲田電車を終夜運転すると

大正十四年十月十三日朝刊（東京朝日）

●万灯押立て、くり出した二十五万人

いつもながらのお会式の賑ひ

池上本門寺昨夜のお会式に詣でた善男善女の数は二十五万を超えたといふ不景気知らずの数字、何しろ芝の伊皿子から八つ山かけての道路は七十有余の講中が万灯押立て団扇太鼓で行列をつくつて練つてゐるので高輪署では署員総出で大警戒、大森署でも必死で事故の防止につとめたが、横浜の能美富作といふ六十八の老人は、有難さに感激したあまり本門寺の石段から転げ落ち左足に重傷、その他重軽傷四名、迷子七人、小競合の喧嘩無数といふ大乱ちき、だが昨年よりは平穩であつたげな

大正十四年十月十四日朝刊（読売）

●お会式の喧嘩 拳銃の下手人捕わる

十二日夜十一時半府下大井町立会川真崎鉛筆工場前でお会式に行く麻布区田島町の睦講中と喧嘩して

ピストルを乱射し菊池源次郎（二二五）外二名を傷つけて逃げた芝区芝浦日ノ出町三ノ三土木請負業赤根組川一心講中のうち当の下手人たる鶴間寅吉（二三三）は十三日午後四時品川新宿八先で品川署で捕まった

大正十四年十月十四日朝刊（東京朝日）

●お会式の短銃犯人昨日捕る

お会式当日、府下大井町で一心講の連中と喧嘩しピストルで重軽傷を負はした犯人一心講中の芝区芝浦日之出町六労働自治会館内鶴間寅吉（二三三）は大森署で厳探中のところ十三日午後五時頃日之出町砂利上げ人夫小屋で捕へられた

大正十四年十月十四日夕刊（東京朝日）

●お会式の万灯を射つた犯人捕縛

但し短銃所持者は逃走

日本刀数口を押収す

十二日午後十一時府下大井町字立会真崎鉛筆工場付近で芝区日之出町三の三建築請負業赤根平治（四四）外十五名の一心講の連中は、お会式に行く途中麻布区田島町睦講中と喧嘩をはじめピストルを乱射して睦講の菊池源太郎（二二五）外三名に重軽傷を負はせて逃走した。訴へにより大森署では同夜十二時半頃本門寺前で一心講連中十六名を捕縛し品川署に引渡し同署で取調べ中であるが右の中にはピ

ストル所持者は何れへか逃走し、捕はれた者等は日本刀数口を携へてみたので之を没収した、原因は十一日夜赤根の子分等が芝浦で万灯のけいこ中付近の高木組土工飛行機の政公事山田政吉と口論したこ
とあり、そのとばつちりらしい

大正十五年十月十二日朝刊（読売）

●本門寺お会式

けふの池上本門寺のお会式は読経奏楽稚児供養があつて信者の群参でにぎはふ筈であるが鉄道省では例年の通り関係省線電車の終夜運転をなし例により三四十万人の人数を見る筈である。

大正十五年十月十二日夕刊（東京朝日）

●お会式のお天気 北風で曇天

十二日は池上本門寺、十三日は堀ノ内妙法寺のお会式で数方の参拝者が押しかけるといふのに天気は相変らずはつきりしない氣象台では十一日夜は北東の風曇り一時晴、十二日は北寄りの風曇天で同夜からは天気は回復する見込といつて居る

大正十五年十月十三日朝刊（読売）

●昨夜池上のお会式 三十万人の人数に十八人の賽銭泥

池上本門寺の御会式の人出は十二日午後九時既に十万五千人を突破し昨年よりも多く三十万人を超へ

そうで警視庁は総出で警戒に當つてゐるが今年は不景気のせいか賽銭泥棒が多く午後九時までに十八人
挙げられ尚詐欺が一人、迷子が五人、電車事故が二件あつた

御会式文化資料叢書 3

明治・大正新聞記事集成

2019年7月13日発行 2024年4月10日電子書籍版発行

御会式文化研究会 編

お会式ねっと 発行

<https://oeshiki.jp>